

『統夷堅志』訳稿(三)

高津 孝

統夷堅志卷二

2. 1 貞雞

房皞希白 盧氏に幸たりし時、客至り、一雞を烹る。其の雄 舍を繞りて悲鳴すること三日、飲啄せずして死す。文士多く詩文を為(つく)り、予は之を號して貞雞と為す。

貞節なニワトリ

房皞、字は希白が、盧氏県の長官であった時、客が訪れたので、一羽のニワトリを料理した。その番いの雄鳥は、役所の建物を回って三日間も悲鳴を上げ続け、飲み食いせず死んでしまった。文学者たちはこのことを詩文にする者が多かった。私はこの雄鳥を貞節なニワトリを呼んだ。

2. 2 王氏の孝犬

王懷州の家の小兒子五哥、一犬を畜ふるに甚はだ馴る。五哥十二、三にして死し、犬は隨ひて葬所に至り、徘徊して望顧すること、見る所の者有るが如し。自後日に一たび墓側に往き、暮に乃ち歸る。是くの如きこと百日に近し。人は孝犬を以て之を目す。

王氏の孝犬

王懷州の子供の五哥は、一匹の犬を飼っていたが、よく懐いていた。五哥が十二、三歳で死亡した時、犬はすぐにその墓に行き、うろうろして見回る様子は、何かが見えるかのようであった。その後、一日に一度は墓のところに行き、夕方になると帰ってきた。このようなことが百日近く続き、人々は孝犬と見なした。

2. 3 狐 樹を鋸(のこぎ)る

陽曲北鄭村中社の鐵李なる者は、狐を捕ふるを以て業と為す。大定の末、一日 網を溝北の古墓の下に張り、一鵠を繫ぎて餌と為し、身は大樹の上に在りて之を伺ふ。二更の後、群狐至り、人語を作(な)して云ふ、「鐵李よ鐵李、汝は鵠を以て我を賺(と)る耶。汝が家の父子は驢群と相似たり、肯て莊農を做(な)さず、只だ殺生を學ぶ。俺の内外の六親は、都(すべ)て是れ此の賊害卻す。今日天數此に到る。好好に樹を下(お)りて來れ。然らざれば、鋸もて倒し別に説話せん」と。即ち鋸を拽く聲有るを聞くに、「鑊を搗(ささ)へ油を煮、當に此の賊を烹るべし」と大呼す。火も亦た隨ひて起る。鐵李は懼れて為す所を知らず。顧るに腰には惟だ大斧有るのみ、樹倒るれば則ち亂りに之を斫らんと思ふ。須臾にして天曉なり。狐は乃ち去り、樹に鋸の痕無く、旁に牛肋數枝有る而已。鐵李は其の變幻にして實無きを知り、其の夜復た往く。未だ二更ならざるに、狐至り、泣き罵

1 房皞：(一一九九—一二八二?)、また顛、灑、字は希白、号は白雲子、平陽或いは臨汾(今の山西臨汾一帯)の人、金末元初の河汾八老の一人、金元代の詩人、元好問と親密、著書に『白雲子集』があるが失われた。『河汾諸老詩集』に詩一卷を掲載する。

2 盧氏：県名、河南省に属する。

3 陽曲：今の山西省太原市陽曲県。

4 二更：晩の九時から十一時。

5 莊農：農夫、農民。

。六親、諸説あり。(一)『老子』「六親不和有孝慈。」王弼注：「六親、父、子、兄、弟、夫、婦。」(二)『管子』牧民「上服度、則六親固。」尹知章注「六親、謂父母兄弟妻子。」(三)漢・賈誼『新書』六術篇は、父、昆弟、從父昆弟、從祖昆弟、從曾祖昆弟、族兄弟を「六親」とする。(四)『史記』管晏列伝「上服度則六親固。」張守節正義「六親謂外祖父母一、父母二、姊妹三、妻兄弟之子四、從母之子五、女子之子六也。」(五)『左伝』昭公二十五年「為父子、兄弟、姊妹、甥舅、昏媾、姻婭、以象天明。」晉・杜預注「六親和睦、以事嚴父、若衆星之共辰極也。」は、父子、兄弟、姊妹、甥舅、婚媾、姻婭を六親とする。

ること俱に倫有り。李は腰に火罐を懸け、巻爆を取りて潜かに之を熱（もや）し、樹下に擲つに、薬火發し、猛（たけ）く大聲を作（な）す。群狐亂れ走（に）げ、網の胃（あみかけ）る所と為り、瞑目して待斃し、一語も出さず。斧椎を以て之を殺す。

狐が樹を鋸で切った

太原の陽曲の北鄭村の中社の鉄李という者は、狐の捕獲を仕事にしていた。大定年間（一一六一―一一九）の末、ある日、網を溝北の古墓の下に張り巡らし、一羽の鳩を繫いで餌とし、自身は大樹の上に登って伺っていた。夜の十一時を過ぎた頃、狐の群れがやってきて、人間の言葉を話して次のように言った、「鉄李よ、鉄李よ。お前は鳩で我々を捕まえようとするのか。

お前の家の親子はロボバの群れとそっくりで、農夫になろうとせず、殺生を学ぶばかりである。わしの親戚、姻戚の近親は全てお前に殺された。今日は運命が尽きたな。さつさと樹から降りてこい。さもなければ、のこぎりで樹を切り倒してから話をつけよう。すぐにのこぎりを引く音が聞こえ、「釜を設えて油を炊け、こいつを煮てやろう」と大声で叫んでいた。火も着いた。鉄李は恐怖でどうして良いかわからなかった。振り返っても、腰に大きな斧があるだけで、樹が倒れたら、彼らを滅多斬りにしようと思った。すぐに夜が明けた。狐は立ち去り、樹にはのこぎりの痕もなく、傍に牛の肋骨が数本あるだけであった。鉄李はこれが幻で実体のないものであることを知り、その夜また出かけていった。九時にもならない頃、狐がやってきて、泣いたり罵ったりしていたが、秩序だっていた。鉄李は腰に火入れを掛けていたが、爆竹を取り出して密かに火をつけ、樹の下に投げると、

火薬が発火し、大きな音が出た。狐の群れは四散して逃げたが、網にかかってしまい、目を閉じて死を待ち、一言も言葉を発しなかった。鉄李は斧と槌で狐を殺した。

2. 4 濟水の魚飛

壬寅の歲、濟源の水中より魚飛び起き、鳥鵲之を啄食して墮すに、人取りて食すに他異無し。甲辰の冬、安賢鎮西南の馬陵、平旦に風雲無きに、忽ち空中より魚七八頭墮ち、來る所を知らず。又た濟源なる者に比べ（差）や小なり。陶先の種魚法は、池中に鰲を著す。爾（しか）らざれば則ち飛び去る。

濟水の魚が飛んだ

壬寅（一二四二）の歲、濟源の川の中から魚が飛び出し、カササギが啄んで空中から放り出した。人がその魚を手に入れたべたが問題なかった。甲辰（一二四四）の冬に、安賢鎮西南の馬陵で、明け方風や雲もない中、急に空中から魚が七八匹落ちてきた。來歴は不明である。濟源の魚に比べてやや小ぶりであった。春秋時代越の范蠡が開発したという養魚法では、池にスッポンを放つという。そうでなければ、魚は飛び去るのである。

2. 5 石佛動く

正大八年、滕州の東三里に石佛一軀有り、忽ち自ら動搖する者（こと）數月、州將の死するに及び乃ち定む。禹冀之^三張仲安の説くを聞けり。

^一 濟源…県名。今の河南省西北部。

^二 陶朱公…春秋時代の越国の大夫であった范蠡の別称。范蠡は越王勾踐を輔佐して呉を滅したが、越王を安樂を共にするべき人物ではないと考え、官職を辞して去り、陶に住んで、朱公と称し、商売で巨富を築いた。『史記』越王勾踐世家参照。

^三 滕州…金の州名。治所は今の山東滕県。

^四 州將…後漢魏晉南北朝の地方の州牧、州刺史に対する別称。ここでは、警察権を有する州の長官を指す。

^五 禹冀之…道士で、元好問の知人である。「單州民妻」の条を見よ。

石仏が動いた

正大八年（一二三二）、山東の滕州の東三里に石仏が一体あり、急に揺れ動くことが数ヶ月続いたが、州の長官が死んで収まった。禹冀之が張仲安から聞いた話である。

2. 6 鬼 樹を抜く

興定の末、曹州¹²の一農民、一日 道を行く中に、忽ち驟雨ありて、空中に人語りて「敢てするや否や」と云ふを聞き、俄に又大笑する聲を聞く。此の人行くこと半里にして、道の左の大柳樹の根を抜きて出し、之を十歩の外に擲ち、泥中に大いなる聲（しり）髒（ふともも）の痕を印すこと、麥籠¹³許（ばか）りの如きを見る。蓋し神の樹を抜きて泥中に偃坐し破笑する耳。

神様が樹を引き抜いた

興定年間（一二二七—二四）の末に、曹州の一農民が、ある日道を歩いていて、急にわか雨に遭ったが、空中から「あえてやらないのか」と言う人の言葉を聞き、突然また大笑いする声聞いた。この農夫が半里ほど進むと、道の左の大きな柳の木が引き抜かれ、それを十歩ばかり外に投げやり、泥中に大きなしりとふとももの痕がついて、ムギを貯蔵するカゴぐらいの大きさであるのを見た。おそらく神様が樹を引き抜き、泥の中に座って大笑いしていただけであろう。

¹² 曹州：治所は今の山東省荷沢県。

¹³ 麥籠：麦を貯蔵する器。

¹⁴ 高有鄰、遂城の人、大定三年（一一六三）科挙に合格、官は工部尚書に至った。

¹⁵ 飛狐：県名、今の河北省涿源県。

¹⁶ 南和：県名、今の河北省南部。

¹⁷ 尉：官名。春秋時代には軍尉、興尉があり、秦、漢以後は太尉、廷尉、都尉。

2. 7 高尉の陰徳

高工部有鄰、字は徳卿。父は飛狐¹⁵令の集にして嘗て南和¹⁶に尉¹⁷たりて、公事を以て千餘人を活かす。徳卿は此の邑に生まれ、四十年後に、安國軍節度使を拜す。父老に當時の事を見るに及ぶ者有りて、杖を扶して迎へ勞ひ、馬前に歡呼す。徳卿も亦た為に碑を尉廳に立て、陰徳¹⁸陽報¹⁹する所以の故を道（い）ふ。月を踰へず、子の嵩、猶子の鑄は同榜登科す。時人之を榮とす。

高集の陰徳

工部尚書となつた高有鄰は、字が徳卿である。彼の父は飛狐県の長官の高集で以前、南和で武官をしており、お上の仕事で千余人を救つたことがあつた。高有鄰はこの村で生まれ、四十年後に、安國軍節度使を仰せつかった。村の年寄りに當時のことを見た者があり、杖を着いて出迎えねざらぬ、馬前で喜びの声をあげた。高有鄰も父のために碑を武官の役所に立て、父の高集の陰徳が現世で見返りをえる理由を述べた。一カ月足らずで、息子の高嵩、甥の子の高鑄が同年の進士となつた。当時の人はこれを賞賛した。

2. 8 胡公狐を去る

胡彦高²⁰は、明昌二年廉を以て擧げられ即墨²¹の令為り。縣解は古城の隅

尉尉、衛尉、校尉等があつた、全て略して尉と言ひ、多くは武職である。

¹⁸ 陰徳：密かに行われた有徳の行い。

¹⁹ 陽報：現世で得られる応報。「陰報」と対になる。

²⁰ 胡彦高（一一五五—一二三三）、名は景常、字は彦高、武安の人。即墨令の時に

群狐を追い払い、民から聖明と称された。官は戸部、刑部員外郎に至つた。

²¹ 即墨：県名、今の山東省青島市東北。

に在り、妖狐の據る所と為り、晝伏せ夜出で、變化し狡獪す。或いは獄卒と為り、囚繫を縦遣す。或いは官妓と為り、驛傳の被襖を盗む。男女を媚惑し、迷亂して死に至る者有り。邑人之を如何ともする無く、反つて香火を以て之を奉り、五十年を餘せり矣。彦高 官に到り、其の然るを問知し、顧みて同僚に謂ふ、「官舎は賢人居する所以なるも、今居する得ざらしめ、而して鬼物之に據る耶」と。時に室の空きたること已に久しく、頽圯殊に甚しく、即ち之を完葺せしむ。明日、廳事に即して理務し、暮に抵り、燭を張りて坐す。夜半、狐 後圃中に鳴き、一倡百和す。少頃にして、⁵² 盆集して庭内を周匝するに、中の一大白狐、地に據りて吼へること、搏噬(はくぜい)せんと欲するが如く然り。卒伍散走し、投避するに所無し。彦高は端坐して動かざるに、而して狐も亦た前まず、良(やや)久しくして引退す。是くの如き者(こと)三日にして、遂に復た來らず。又た十許日にして、一女奴に傳きて、跳躑歌笑し、狂へること寐語するが若し。彦高は朱書を以て奴の釵の間に置き、逼りて之を逐ふに、奴は即日人を知れり。明旦、尉は巡邏自り還り、群狐の數百なるに遭ふに、縣の東南由り去れり。狐は復た登州⁵³の吏目と江崇家の一婦を惑はす。崇は海島⁵⁴中に就きて道士に行法を請ふ、婦人の狂亂に乗じて、縛りて車輪の上に置き、軸を地中に埋め、人をして之を轉せしむるに、既に久しくして、婦人快く腥き涎を吐く、乃ち是れ即墨の狐にして、胡公の為に逐せられて此に至る。即墨の父老は彦高の為に石に刻み、「胡公去狐碑」と名づく。屏山の李之純⁵⁵の記也。彦高、武安⁵⁶の人、仕へて鳳翔⁵⁷同知⁵⁸に至る。

胡公が狐を追放する

胡彦高は、明昌二年(一一九二)、清廉潔白ということで朝廷に推薦され、即墨県の長官となった。県の役所は古い城壁の片隅にあり、妖怪狐に占拠されていた。彼らは昼は隠れ夜に出没し、変身してイタズラを行なった。ある時は牢番となって、人を釈放したり、ある時は官妓となって、駅舎の布団包みを盗んだりした。男女を誘惑し、理性を失つて死んでしまうものも出た。村人たちはどうしようもなく、かえって、お香や灯明を捧げる有様で、もう五十年も過ぎた。胡彦高が着任し、現状を聞き取り、同僚たちを振り返つてこういった、「官舎は賢人を住まわせる場所であるが、今は住むことができず、妖怪が占拠しているのか」。当時、久しく空き部屋の状況が続いていたが、破損がはげしく、ただちに修復させた。翌日は、県舎で仕事に従事していたが、夕方になると明かりを灯してそこに座っていた。夜半に一匹の狐が役所の裏の田んぼで鳴くと、多数の狐がそれに呼応した。しばらくすると狐は群れをなして庭園の中を歩き回り、一匹の大きな白狐が地面に座つて吠え、掴みかかつて噛み付こうとするかのようにであった。狐の軍団は散らばつて駆け回り、胡彦高は隠れる場所もなかった。胡彦高は端坐して動かなかったが、狐も進み出ず、ややしばらくして去つていった。こうした事態が三日続き、二度と来なくなった。また、十日ばかりして、一人の侍女にとりついて、飛び跳ねて笑い歌い、狂つて寢言のようなことを言った。胡彦高は朱で文字を書いて、侍女の簪の間において、狐を追いついたところ、侍女はすぐさま人事不省から回復した。翌朝、武官が巡視より戻ると、數百の狐の群れに出会い、彼らは県の東南部から去つて

⁵² 盆：並びに、一緒に。

⁵³ 登州：今の山東半島東端。

⁵⁴ 吏目：官名。元では儒学提举司及び各州が吏目を設けて参佐官としていた。

⁵⁵ 海島：海洋中の島。

⁵⁶ 李之純：李純甫(一一七七一—一二三三)、字は之純、号は屏山。翰林院に入り、科挙の試験委員長となり、名声を得た。「当世の竜門」といふ呼び名を得た。「

記」、吳繼寛抄本は「辭」に作る。

⁵⁷ 武安：県名、今の河北省西南部。

⁵⁸ 鳳翔：金の路の名、今の陝西、甘肅、寧夏の境界が接する領域。

⁵⁹ 同知：官名。副官を言う。宋代には中央に同知閤門事、同知枢密院事があり、府州軍にも同知府事、同知州軍事があった。元、明はこれを踏襲した。

いった。狐は再び登州の補佐官である江崇の家の一婦人を誘惑した。江崇は海島に向いて道士に狐を呪術で退散させるよう依頼した。道士は、婦人が錯乱しているときに車輪の上に縛りつけ、車軸を地中に埋めて回転させた。しばらくすると、婦人は勢いよく生臭いヨダレを吐き出したが、これが即墨の狐であって、胡彦高によってここまで追い詰められたのである。即墨の老人たちは、胡彦高の事績を右に刻み、「胡公去狐碑」と名づけた。これは屏山の李之純の記録である。胡彦高は、武安の人で、鳳翔路の副長官にまで出世した。

2.9 呂守の詩識

呂卿、字は祥卿、大興⁸²の人。汝州⁸³に刺たるも、一月にして罷む。詩を望松樓に題して、「珍重す樓中舊山の色、好し眉黛を將て新官に事へん」と有り。未だ幾（いくばく）もなく物故し、人は以て詩識と為すと云ふ。

呂守の詩識

呂卿、字祥卿は、大興の人である。汝州の長官であったが、一カ月で辞任した。在任中、「珍重す樓中旧山の色、好し眉黛を將て新官に事へん」（望松樓から見える高山の昔ながらの景色にご挨拶申し上げる。新しい長官が着任されたら、新しく眉毛を整えてお仕えるのがふさわしいであろう）と言う詩を望松樓に書きつけた。辞任後、間もなく死亡し、世の人はこの詩を詩識（予言の詩）であると言った。

⁸² 大興：金の府名、今の北京市西南。

⁸³ 汝州：今の河南臨汝一帯。

⁸⁴ 内翰：唐宋では翰林を内翰と言った。

⁸⁵ 孟友之：孟宗獻、字は友之、開封の人。大定年間（一一六一―一八九）に翰林供奉であった。後に母が亡くなり、悲嘆のあまり没した。

⁸⁶ 單州：今の山東単県。

⁸⁷ 内艱：母の喪に遭遇することを「内艱」という。

2.10 孟内翰の夢

孟内翰⁸⁸友之⁸⁹、大定三年、郷、府、省、御の四試皆第一たり。翰林に供奉す。曹王府文學を歴る。疾を以て醫を尋ね、之を久しくして、同知單州⁹⁰軍州事を授かり、内艱⁹¹に丁（あ）ひ、哀毀して卒を致す。友之未だ第せざる前に、夢中に前塗の至る所を預知し、其の後皆驗あり。鄰人李生言ふ、「友之の死の年の六月中、連夕星 虚軒の前に殞つ」と。汴人高公振⁹²時夫之を挽きて曰く、「見説（みるなら）く平生の夢、前途は盡く目前にあり」と。又た云ふ、「人は嗟く 玉樹埋もれたるを、天は為に文星⁹³を啟く」と。詩は甚しくは工ならずと雖も、以て友之の出處の際、死生の變を見る有り。造物者⁹⁴は皆な之をして前知⁹⁵せ使め、其れ海内の重名⁹⁶を以て之を昇（あ）たへる者は、偶然ならざると為す也。

孟内翰の夢

翰林院所属の孟友之は、大定三年（一一六三）に、郷試、府試、省試、御試の四つの科挙試験で全て一番であった。翰林院にお仕えることになり、曹王府文學を歴任した。病気になるので医者を探ねたところ、しばらくして、同知單州軍州事になった。母親がなくなり、哀悼のあまり死亡した。友之がまだ科挙に合格する前、夢で将来のことを予知し、のちに全て実現した。鄰人の李生は「友之の死亡した年の六月中に、毎晩、隕石が虚軒（孟友之の書齋？）の前に落ちた」と言う。汴人の高公振、字は時夫

⁸⁸ 高公振：字は特夫、正隆（一一五六―一一六六）初の進士で、密州刺史に終わった。

⁸⁹ 詩人の家系である。

⁹⁰ 文星：星の名。文昌星、又は文曲星、文曲星は文才を司ると言われ、後に文才のある人を指すようになった。

⁹¹ 造物者：万物の創造神。

⁹² 前知：預知、預見、事前に知ること。

⁹³ 重名：名声。

は、孟友之を哀悼して「見説く平生の夢、前途は盡く目前にあり。(聞いたところでは、孟友之どのの平生の夢によって、将来のことは全て目の前にあった)」、また、「人は嗟く玉樹の埋もれたるを、天は為に文星を散く。(地上では、人々が、優れた人材が能力を發揮することなく埋もれてしまったと嘆くが、天上では、彼のために文学者の神様である文星の地位を空けていたのである)」と言う詩を作った。詩はあまりうまくないが、孟友之の出処進退、生没の有様をそこに見ることが出来る。造物者が彼に将来のことを予知させ、おそろく高い評判を与えたことは、偶然ではなかった。

2. 11 麻神童

麻九疇¹¹、字は知幾、獻州¹²の人なり。三歳にして字を識り、七歳にして草書を能くし、大字を作(な)して數尺に及ぶ者有り。至る所 神童の目有り。章宗¹³を召見し、問ふ、「汝 宮中に入るに、亦た懼怯するや否や」と。對へて曰く、「君臣は猶ほ父子のごとき也、子寧(なん)ぞ父を懼れん乎」と。上 之を奇とす。明昌以來、神童を以て稱する者五人。太原¹⁴の常添壽は、四歳にして詩を作りて云ふ、「我一卷の經有り、筆筆成るを用ゐず」と。合河¹⁵の劉文榮は、六歳にして詩を作りて云ふ、「鶯花 物態を新たにし、日月天公を老わしむ」と。劉微は七歳にして、旨を被け「鳳皇來儀」¹⁶を賦す。新恩の張世傑は、五、六歳にして、亦た召入せられ、「元妃¹⁷素羅

扇畫梅を賦して云ふ、「前村消(か)くを得ざるに¹⁸、移して月中に向(お)いて栽」と。其の後常に隱居して出でず。餘の三人は皆な稱道¹⁹すべき無し。獨だ知幾のみ能く自ら樹立す。一旦名天下に重ければ、耆舊²⁰・間閔公²¹の如きは、且つ「徵君」²²を以て之を目して名よはず²³と云ふ。

神童の麻九疇

麻九疇、字は知幾、獻州の人である。三歳で字を覚え、七歳で草書をうまく書け、數尺にもなる大字の作品を書いた。どこへ行つても神童とみなされた。章宗皇帝が謁見し、「宮中上がることは怖くはなかったのか」と質問すると、「君臣関係は父子のようなものである。子供は父親を恐れないうしよ」と答えた。章宗は彼を優れた人物と認めた。明昌(一一九〇―九六)年間以降、神童と呼ばれたものは五人いる。太原の常添壽は、四歳で「我一卷の經有り、筆筆成るを用ゐず(私は一卷の經典を所持している。それは心の中にあるもので、一字一字書き留めることを必要としない)」という詩を作った。合河の劉文榮は、六歳で「鶯花物態を新たにし、日月天公を老わしむ(ウグイスや春の花が咲き誇ること、世界の有様は新しく変化し、太陽と月が運行することで時間が刻まれ、天の主宰者は歳をとる)」という詩を作った。劉微は七歳で、勅命を受けて「鳳皇來儀」を作った。新恩の張世傑は、五、六歳で、劉微と同様に宮中に召され、「前村消(か)

¹¹ 麻九疇(一一七四―一二三三)：金代の文学者。広く五經に精通していた。正大

(一二三四―三二) 初めに特賜進士となり、応奉翰林文字となった。後にモンゴル軍の捕虜となり、病死した。彼の文学作品は、精妙で独創的、力強く、詩はとりわけ巧妙緻密であった。

¹² 獻州：今の河北献県。

¹³ 章宗：金の章宗完顔璟(一一六八―一二〇八)、小字は麻蓬葛、虎水(今の黒龍江省哈爾濱市阿城区)の人。金朝第六代皇帝。在位は一一八九―一二〇八年。

¹⁴ 太原：今の山西省の省都の太原。

¹⁵ 合河：鎮名、山西の旧蒲州府境。

¹⁶ 鳳皇來儀：「鳳皇來儀」とも作る。『尚書』益稷「鳳皇來儀」(鳳凰が美しく舞

い降りる)

¹⁷ 元妃：君主或いは諸侯の正妻。

¹⁸ 消不得：なくてはならない。元・関漢卿「魯齋郎」第一摺：「消不的你請我墳院裏坐一坐、教你祖宗教得生天。」

¹⁹ 稱道：称賛する。

²⁰ 耆舊：尊敬を受ける年長者。

²¹ 間閔公：金・宣宗の時の礼部尚書である趙秉文(一一五九―一二三三)、号は閑閑公。

²² 徵君：朝廷からの招聘を断り出仕しない隱者。

²³ 不名：直接名前を呼ばず、尊重の意を表す。

くを得ざるに、移して月中に向(お)いて救う(前)の村には春を知らせる梅花が欠かせないのに、こうして白い絹のうちわに描かれて宮中に移されようとしている」という「元妃素羅扇畫梅」詩を作った。その後、隠棲したままで官吏とならなかった。残りの三人はいずれも賞賛すべき点はない。ただ麻九疇だけが成果を上げた。一旦その名が天下に鳴り響くと、趙秉文のような年長の有力者は、さらに彼を「徵君」(朝廷の招きを断つた隠者)と認め、年齢が下であるにも関わらず名前を呼ぶことを憚ったという。

2. 12 陳守の誠感⁵²

陳大年は、字世徳、吉州⁵³の人なり。太和中 吾州⁵⁴に刺す⁵⁵。時に秋旱⁵⁶、蝗南よりして北す。世徳石嶺關⁵⁷に祭り、遂に入境せず。死囚⁵⁸馬柏兒、移勘⁵⁹して數州を更へ、已に十三年なり矣。陳は已に其の死を決し、止(た)だ署字⁶⁰を待つのみ矣。陳 夜 星下に禱りて、「囚を決するに復た疑ひ無きも、尚ほ冤有るかと慮る。今旱已に極まる。囚果して冤ならざれば、明けて當に大いに雨ふるべし。如(も)し冤なれば、則ち雨且(まさ)に止(や)むべし」と。此を以て之を下す。明日大いに雨ふり、遂に此の囚を決す⁶¹。是の歲大熟す⁶²。

吾州知事である陳大年の誠感

陳大年は、字世徳、吉州の人である。泰和(一一〇一―一〇八)年間に吾州の知事となった。ちょうどその時に秋の日照りに遭遇し、飛蝗(トノサマバッタ)が南から北上してきた。陳大年は石嶺関で天を祭り、飛蝗は吾州の境内に入らなかった。死囚の馬柏兒は、審問の場所を移して數州をたらい回しにされ、もう十三年になった。陳大年は死刑執行を決断し、ただ署名をするだけであった。陳大年は夜星空の下で、「死刑執行には全く疑念がないが、冤罪かもしれないとの憂慮がある。今日照りは極限に達している。もし死刑囚が冤罪でないなら、明日はきつと大雨になるだろう。もし冤罪であれば、雨は降らないだろう」と祈り、これを占いとした。翌日大雨が降り、結局死刑囚を処刑した。この年は豊作であった。

2. 13 虞令公⁶³の早慧⁶⁴

虞令公仲文質夫⁶⁵は、四歳にして「雪花」詩を賦して云ふ、「瓊英⁶⁶と玉蕊⁶⁷と、片片と階墀⁶⁸に落つ。花の来りし處を問著⁶⁹するに、東君⁷⁰も也(また)知らず」と。仕へて遼の相と為り、歸朝⁷¹して平章政事、濮國公を授けらる。

⁵² 誠感：誠実さが天地の神々を感動させ、奇跡が出現すること。

⁵³ 吉州：金の州名、今の山西省吉県。

⁵⁴ 吾州：忻州、今の山西省忻州市。

⁵⁵ 刺：州の刺史或いは郡守となること。

⁵⁶ 秋旱：秋の日照り。

⁵⁷ 石嶺關：今の山西忻州地区南の境界、要害の地。

⁵⁸ 死囚：死刑判決が出たが、未執行の囚人。

⁵⁹ 勘：審問する。

⁶⁰ 署字：文書に署名をすること。

⁶¹ 決囚：死刑判決を出すこと、あるいは死刑を執行すること。

⁶² 大熟：豊作。

⁶³ 令公：中書令の尊称。

⁶⁴ 早慧：年少にして極めて聡明なこと。

⁶⁵ 虞仲文：字は質夫、寧遠の人。絵画をよくした。科擧に合格後、地方官を歴任し、天会年間(一一三三―一一三七)に翰林侍講学士になった。論は文正。

⁶⁶ 雪花：空中に漂う雪が花のようであるため、名付けられた。

⁶⁷ 瓊英：玉のように美しい花びら。

⁶⁸ 玉蕊：玉のような花。

⁶⁹ 階墀：石段、階段、石段の面。

⁷⁰ 問著：問い詰める。

⁷¹ 東君：春を司る神。

⁷² 歸朝：朝廷に帰順する事。

虞仲文の早熟さ

中書令の虞仲文、字質夫は、四歳で「瓊英と玉蕊と片片と階墀に落つ。花の来りし処を問著するに、東君も也（また）知らず（美玉でできた花弁と雄しべ雌しべのような雪片が階段に降り積もる。この花はどこからやって来たのかと質問するが、春を主宰する神様も答えられない）」という「雪花」詩を作った。仕官して遼王朝の宰相となり、（保大二年（一一二二）十二月、金の太祖が遼の南京（北京市）を陥落させた時）、金王朝に帰順して平章政事、濮国公を授けられた。

2. 14 陳希夷の靈骨

華山の張超谷に、陳希夷の靈骨³¹在り焉。山徑³²險絶³³にして、下臨すれば地無し。河中³⁴の李欽叔嘗て其の處に至る。陳の骨は長大にして、今人に異り、堅重腴瑩なること青玉の如し。道力³⁵の至る所、具に此に見（あら）はる。弟子某の遺骸も亦た其の旁に在り、陳を以て之に比すに、仙凡は倅（ひとし）からざる為り矣。

³¹ 陳希夷：陳搏（八五一―八九九、五代末、宋初の道士、宋太宗によって希夷先生という号が賜与された。道教の呼吸法を實踐し、穀物を食さず、眠ると百日あまり目覚めなかった。著書に『指玄篇』があり、養生法と丹藥製造法について記述している。
³² 靈骨：仏舍利。また、高僧の遺骨。
³³ 山徑：山の峰。
³⁴ 絶險：極めて険しい。
³⁵ 無地：地面を見ることができない。高さや範囲の広さを形容する。
³⁶ 河中：府の名、今の山西省永濟県。
³⁷ 李欽叔：李欽能（一一九〇―一二三三）、字は欽叔。貞祐三年（一一二五）の進士で、応奉翰林文字を授けられ、翰林修撰になった。正大年間の末に、鎮南軍節度副使として河中帥府経歴官に赴任した。モンゴル軍が河中を陥落させた時、陝州に逃げ、軍の反乱に遭遇し殺害された。李欽能は元好問の三知己の一人李献甫の従兄で、親密な関係にあり、相互に酬唱した詩詞は大変多い。『統夷堅志』中にも言及が多い。

陳搏の不思議な遺骨

華山の張超谷に、陳搏の不思議な遺骨が存在した。山の峰は険しく、下を見ると地面が見えないほどであった。河中の李欽叔は以前そこを訪ねたことがある。陳搏の遺骨は長く大きく、今の人間のものとは異なり、碧玉のように堅く重く艶やかであった。彼の道士としての不思議な力の到達点、具体的にここに現れている。弟子の遺骸もその側にあったが、陳搏のものと比較すると、仙人と凡人の違いは顕著であった。

2. 15 馬光塵の畫

馬資深の子光塵、十許歳にして、山水を畫き、遠意³⁶有り。甫（はじ）めて成童³⁷たりて卒す。王子端³⁸内翰、其の畫に題して云ふ、「珠璧³⁹佳城⁴⁰の下、丹青⁴¹敗稿の間。殘年⁴²兩行の涙、絶筆⁴³數重の山」と。人は謂ふ、童叟

³⁶ 道力：修行によって得られた力。
³⁷ 馬資深：評注によれば、王庭綺（一一五五―一二〇二）の同時代人と推定され、また、馬天探（一一七二―一二三三）とその弟雲卿、雲漢が共に画家であったことから考えると、馬資深は或いは馬天探の父の世代であろうかと推定されている。
³⁸ 遠意：高遠な意趣。
³⁹ 成童：年長の子供。八歳以上、或いは十五歳以上とも言われる。
⁴⁰ 王子端（一一五五―一二〇二）：名は庭綺、号は黃華山主、熊岳（今の遼寧省臺県）の人。大定十六年（一一七六）の進士、官は翰林修撰にいたる。畫画の評価に詳しく、山水画や墨竹に巧みであった。
⁴¹ 内翰：唐宋代では翰林を内翰と言った。
⁴² 珠璧：真珠と璧玉。
⁴³ 佳城：墓地を指す。
⁴⁴ 丹青：画像、繪画。
⁴⁵ 殘年：一生涯の終わろうとする年月。人の晩年を指すことが多い。
⁴⁶ 絶筆：死の直前に書いた文字、作品等。

88にして書を以て稱せられ、且つ名流の嗟惜する所と為るは、古も亦た多見せざる也⁸⁷。

馬光塵の絵画

馬資深の子の光塵は、十歳あまりで、山水画を描き、深遠な趣があった。十五歳になつたばかりでなくなつた。翰林修撰の王子端はその絵に「珠壁佳城の下、丹青敗稿の間。残年両行の涙、絶筆数重の山。」（真珠と璧玉にも比すべき才能ある馬光塵くんは若くしてなくなり、墓地に書き残しの絵画とともに眠っている。彼の絶筆となる山水画を見るにつけ、彼の短い生涯を思い涙が流れる。）と題した。人々は、まだ子供であるのに画家としての名声があり、一流の人物たちにその死が惜しまれたのは、古来多くはないと言つた。

2. 16馬 定襄の簿を噛む

太和中、一の國姓⁹²の人 定襄⁹³の簿と為る。一日、河西⁹⁴の程氏の馬逸（はし）り、直ちに廳に上り主簿⁹⁵を噛みて倒す。旁立せる數十人、號叫して捶楚⁹⁶するも、救ふ能はず。半時⁹⁷ならざる頃、簿を噛みて死す。傷折⁹⁸せる處所は視るに忍びず。馬走⁹⁹（に）げて城を出るに、羅して之を得たり。

93 童卯⁹³：童子、童年を指す。卯は、子供の髪型。

94 國姓⁹⁴：本朝の皇帝の姓。

95 定襄⁹⁵：県の名、今の山西定襄県。

96 河西⁹⁶：春秋、戦国時代では今の山西、陝西両省の間の黄河の南側の西部を指す。

97 主簿⁹⁷：官名。文書管理、事務を所掌した。唐宋代は主簿を初任官とした。

98 捶楚⁹⁸：杖や鞭で打つこと。

99 半時⁹⁹：極めて短い時間。

100 傷折¹⁰⁰：傷を受けること。

101 報怨¹⁰¹：あだや恨みに報復すること。

102 翰林¹⁰²：官名。翰林學士を指す。

三日にして簿を葬するに、馬を縛りて火中に投ず。人は謂ふ、此の馬は物の憑く所と為らざれば、則ち他世の報怨¹⁰¹也と。

馬が定襄の主簿を噛む

泰和（二二〇一〇八）年間、金王朝と同姓の人物（完顔部の族人）が定襄の主簿となつた。ある日、河西の程氏の馬が走り出し、すぐに役所に上がり込み主簿を噛んで押し倒した。側に立っていた数十人は、叫び声をあげて鞭で打ち据えたが、救うことができなかつた。あつという間に、馬は主簿を噛み殺した。主簿の傷跡は見るに忍びないものであつた。馬は逃げて城内を出たところを、網を張つて捕まえた。三日後、主簿を埋葬し、馬を縛つて火中に投じた。人々は、この馬は何か取り憑いたものでないなら、前世の恨みによる報復だと言つた。

2. 17鬼市

裴翰林¹⁰³、擇之は、陽武¹⁰⁴の人なり。六七歳の時、大父¹⁰⁵の馬上を以て抱かれて縣の東北の莊に往く。外壕¹⁰⁶に至り、門の南北に市集¹⁰⁷、有るを見るに、人物皆一尺許り、男女老幼、吏卒¹⁰⁸、僧道¹⁰⁹、穰穰¹¹⁰として往来し、市人¹¹¹の買賣、負擔¹¹²、驢駝、車載¹¹³、有らざる所無し。以て其の大父に告ぐるに、

103 陽武¹⁰³：県の名、治所は今の河南原陽東南。

104 大父¹⁰⁴：祖父或いは外祖父。

105 外壕¹⁰⁵：拠点の外周あるいは陣地の前に掘った掘割。

106 市集¹⁰⁶：固定された場所で、定期的に行われる商業行為。

107 吏卒¹⁰⁷：胥吏と役所の下役。

108 僧道¹⁰⁸：僧侶と道士。

109 穰穰¹⁰⁹：多い。

110 市人¹¹⁰：市場の中の人、商人。

111 負擔¹¹¹：肩や背中に担ぐ。

112 車載¹¹²：車で運ぶ。

大父は以て妄と為し、之を信ぜざる也。蓋し三、四たび其の處に至るも、亦た皆之を見る。此と呂氏『礪石録』に記する「武平¹¹³の周鼎、童時村居¹¹⁴するに、一日、縣人¹¹⁵の市集あり、鼎は長耳¹¹⁶に騎し、父に従ひて市に入る。時に地色微かにして、道旁に兩列するは皆な佛像なるを辨見す、目を閉じて敢て視ざるに、目を開けば又た見えず」とは、兩事大いに相類す。但だ佛像の多きは、何ぞ也。

幽霊市場

翰林院に所属する裴扶之は、陽武の人である。六七歳の時、祖父（あるいは外祖父）の馬に乗せ抱えられて陽武県の東北の莊園に出かけた。県の外壕に到達すると、城門の南北に市場が開かれているのが見えた。人物は皆二尺ぐらいで、男女に老人幼児、役人に兵隊、僧侶に道士が、大勢往来し、市場の商人は売買したり、荷物を担いだり、ロバにラクダ、荷車、全てが揃っていた。それを祖父（あるいは外祖父）に告げると、彼は妄想だとして、信用しなかった。おそらく三、四回その場に行つたが、同様にそれが見えた。この話と呂氏『礪石録』に記述された「武平の周鼎は、子どもの時、田舎暮らしをしていたが、ある日、県の人々の市場が開かれた。周鼎がロバ乗って、父に従って市場に入った。その時、地面の色がうすぼんやりとし、道路脇に二列に並んでいるのは全て佛像であるのが見分けられた。目を閉じて見ないようにし、目を開くと見えなくなつた」という話は、類似している。ただ佛像が多いのはどうしてだろう。

- 113 武平：今の内蒙寧城西。
- 114 村居：郷村に住む。
- 115 縣人：同じ県の人。
- 116 長耳：ロバの別称。
- 117 原武：県の名、原武と陽武とは合併して今の河南原陽県となる。
- 118 附城：付属する小さな城郭都市。
- 119 翁母：舅と姑。
- 120 辛卯：一二三二年。

2. 18 原武の閻氏の犬

原武附城¹¹⁸の堤下の閻老家、其の翁母¹¹⁹辛卯¹²⁰の冬の兵亂に遭ひて其の家の牆下に死す。丁壯¹²¹虜せ被¹²²れ、埋掩¹²³に及ばず。此の時僵尸¹²⁴野に滿ち、例として狐犬の食ふ所と為り、誰某を辨ぜず。閻氏の犬も亦た人を食ふも、但だ翁母を守護¹²⁵し、日び眾犬と鬥ふ、他犬は敢て近づくる無し。前後月餘、閻氏の子姪¹²⁶に逃歸¹²⁷する者有り、竟に全き骸を得て瘞¹²⁸す。真の孝犬也。

原武の閻氏の犬

原武の附城の堤防下の閻老家では、閻家の両親が辛卯の年（一二三二）の冬の戦亂に遭遇しその家の土塀の下で死んだ。若者はみな捕虜にされ、埋葬ができなかつた。この時、死体が野原に溢れ、概ね狐や犬に食われ、誰の死体かもわからなかつた。閻氏の犬も死体を食べたが、ただ閻家の両親を守り、毎日多くの犬と戦い、他の犬はあえて近づくものはいなかつた。一月あまり経って、閻氏の子供や従兄弟が逃げ帰ってきた。意外にも傷のない遺骸を得て埋葬した。本当の孝犬である。

2. 19 歴年の讖

古人壽を上（たてまつ）る¹²⁹に皆な千萬歳の壽を以て言と為す、國初種

- 121 丁壯：働き盛りの男性。
- 122 埋掩：埋葬。
- 123 僵尸：死体。
- 124 守護：見守り保護する。
- 125 子姪：子供と甥の世代の総称。
- 126 逃歸：逃げ帰る。
- 127 瘞：埋葬する。
- 128 上壽：酒を捧げて、長寿を祝うこと。

人¹²⁹純質¹³⁰にして、觴を擧ぐる¹³¹毎¹³²（ごと）に惟た百二十歳を祝ふ而已¹³³（のみ）。蓋し武元¹³⁴は政和五年、遼の天慶五年乙未を以て收國元年¹³⁵と爲し、哀宗天慶二年¹³⁶蔡州¹³⁷の陥らるに至りて、適たま兩甲子周¹³⁸れり矣。歴年の讖¹³⁹遂に應せり。

歴年の讖

古人は長寿の祝いをする時に、みな千歳、万歳の長寿という言葉を使った。金の建国の初め、女真族は純粹素朴で、酒を酌んで長寿を祝うたびに、ただ百二十歳と言うだけであった。思うに、金の太祖武元皇帝阿古達は、北宋の政和五年（一一一五）、遼の天慶五年（一一一五）を金の收國元年とし、金の哀宗天興二年（一二三四）蔡州の陥落（金の滅亡）に至って、偶然にも百二十年になった。歳を経ての予言がとうとう実現したのである。

2. 20 異齊の讖

天會八年、劉豫¹⁴⁰を冊して大齊皇帝と爲し、大名に都（みやこ）す。諸門舊（も）と異齊、安流¹⁴¹、順豫¹⁴²の號有り、門名色瑞¹⁴³あるを以て、因り

¹²⁹ 種人：同じ種族の人。ここでは女真族の人を指す。

¹³⁰ 純質：単純で素朴。

¹³¹ 擧觴：盃をあげて飲酒すること。

¹³² 武元：金王朝女真族の完顔部。

¹³³ 北宋の政和五年、遼の天慶五年乙未は、金の太祖武元皇帝阿古達の收國元年で、一一一五年。

¹³⁴ 中華書局本の割注に「慶疑当作「興」。また、中華書局本では天興二年とする。

¹³⁵ 蔡州：今の河南汝南。

¹³⁶ 兩甲子周：一百二十年を指す。

¹³⁷ 讖：預言。

¹³⁸ 劉豫：北宋の濟南知府、一一二八年に金に降伏した。一一三〇年九月、金朝は劉豫を建てて齊国皇帝とし、大名府を首都とした。中華書局本は「劉預」に作り、門名も「順預」とする。

て三市¹⁴⁴の門名阜昌¹⁴⁵なる者を取りて建元¹⁴⁶す。傳會に出ると雖も、亦た數有り¹⁴⁷焉。

異齊門の予言

天會八年（一一三〇）、（北宋を滅した金朝は、占領した北部中国に対し）劉豫を封じて大齊皇帝とし、大名を首都とした。大名府の宋代の門には、異齊、安流、順豫という名称の門があった。これらの門の名称は、（異齊（齊に讓る）、安流（劉（流）を安んずる）、順豫（劉）豫に従うと解釈可能で）大齊皇帝劉豫に対する瑞兆となっていたため、同じく大名府の三市坊の門の名称「阜昌」を採用して建国後最初の年号とした。こじつけによるとは言え、定められた運命である。

2. 21 桃杯

¹⁴³ 『宋史』地理二・京城・北京「東南朝城門曰安流、朝城第二重曰異齊」。

¹⁴⁴ 『宋史』地理二・京城・北京「北京、慶曆二年、建大名府為北京、宮城周三里一百九十八步、即真宗駐蹕行宮、城南三門：中曰順豫」。

¹⁴⁵ 評注によれば、門の名前を「異齊」（讓齊（齊に讓る）の意味、「安流」（「流」と「劉」とは同音、「順豫」（劉豫に順う）としたことは、劉豫を齊国皇帝とするという予言のようである。訳者：「色瑞」の用例は検出できなかった。瑞兆の意味か。

¹⁴⁶ 『宋會要輯稿』方域二・北京・神宗・熙寧八年「左、右四廂凡二十三坊：永寧、延福、靖安、惠安、宜春、敦信、安仁、善化、七賢、大安、德教、宜春、崇化、三市、普寧、廣利、長樂、景行、景明、鳳臺、延康、福善、保安」。

¹⁴⁷ 『宋史』地理二・京城・北京「熙寧九年、改正南河門曰景風、南埭曰亭嘉、鼓角曰阜昌」。「阜昌」の意味は繁盛。

¹⁴⁸ 建元：開国後、最初の年号。

¹⁴⁹ 有數：運命が定められていること。

鞏¹⁴⁶下の韓道人¹⁴⁷は、本と衣冠¹⁴⁸の家に、曾て蔭¹⁴⁹を以て官に補せらる。中年¹⁵⁰異人¹⁵¹に遇ひて、得る所有り、即ち官を棄てて道を學ぶ¹⁵²。予曾て之に秦州¹⁵³の隴城¹⁵⁴に見ゆ。説けり、太和の初、秋雨の後、山間を行く、忽ち一大葉の流れに随ひて下るを見る、韓は初め以て意と為さざるに、俄にして數葉の間の一桃、大きき杯盃の如き、石の礙する所と為りて止まる。韓取りて之を得るに、桃は紅くして香りありて、凡目¹⁵⁵の常見する所に非ず、希遇¹⁵⁶を知る。三峰を望み再拜して之を食ふ。盡く枝葉を懷きて歸る。洞穴の高絶の處に就きて、桃核¹⁵⁷を鑽して破り、仁を取りて之を呑むに、甘きこと酥蜜¹⁵⁸の如し。因りて核を以て兩酒杯と為し、各おの一勺餘りを受く。韓は此れ従り或いは食し或いは辟穀¹⁵⁹す。時に年已に六十、狀貌は只だ四十許りの人の如し。一日予に従ひ酒を乞ひ、此の杯を以て酌す。核は酒を得て、紅潤¹⁶⁰なること新しきが如し。予に「桃杯詩」を賦せんことを約せしむるも、因循¹⁶¹にして未だ暇あらず。北渡の後、長春¹⁶²の尹師も亦た一桃杯有り、是れ宣、政¹⁶³の内府¹⁶⁴の物なりと云ふと云ふ。

桃杯

鞏県治下の韓道人は、もともと官僚を輩出する家の出身で、以前、先祖の功績で官職に叙せられた。中年になって不思議な人物に遭遇し、会得するところがあり、直ちに自ら官職を放棄して道教の修行を始めた。わたし

- 146 鞏：春秋時代の国名。今の河南省鞏県境。
- 147 道人：道教徒、道士。
- 148 衣冠：官位が高く身分のある人、士大夫を指す。
- 149 蔭：庇蔭。子孫が先祖の功績によって官位や免罪を受けること。
- 150 中年：四五十歳の年齢を指す。
- 151 異人：神人、方士。
- 152 學道：僧侶、道士の修行をする。
- 153 秦州：治所は今の甘肅秦安北。
- 154 隴城：治所は今の甘肅秦安東北隴城鎮。
- 155 凡目：俗眼。俗世間の人々の見方。

は以前、彼に秦州の隴城で会ったことがある。その時、彼は次のように言った、泰和年間（二二〇一—二二〇八）の初め、秋雨の降り止んだ後、山道を歩いていると、急に一枚の大きな葉が流れに随つて下ってくるのを見た。韓は最初意に介さなかったが、俄に數枚の葉の間の酒杯のような大ききさの一個の桃が、石に遮られて止まった。韓が手に取ると、桃は紅く良い香りがあり、凡人が常に見ているようなものとは違っていた。そこでこれは本當に稀な出会いであることが分かった。三つの峰を望み見て再拜し桃を食へ、枝葉を全て抱えて家に戻った。高山絶壁の洞穴で、桃の種に穴を開けて壊し、中の仁を取り出して飲み込んだ、酥（バター）や蜂蜜のように甘かった。ついでに種で二つの酒杯を作ったところ、それぞれ一勺余りの容量があった。韓はそれ以降、食事をしたり、穀物を食べることをやめた。年齢はすでに六十歳であったが、容貌は四十ばかりの人のようであった。ある日わたしを訪ねて酒を所望し、桃の種で作った酒杯で酌をした。酒杯は酒を入れると、紅く艶やかになってきたばかりのようであった。わたしに「桃杯詩」を作ること約束させたが、遅れてしまつて、今も作る暇がない。北宋王朝が滅亡した後、長春の尹師も一個の桃杯を所有していたが、これは、北宋の政和、宣和年間（二二一一—二二二五）の王室倉庫の物であるという。

- 156 希遇：稀に遇ふ。
- 157 桃核：桃の種。
- 158 酥蜜：酥酪と蜂蜜。
- 159 辟穀：五穀を食さないこと。道教の修行法。辟穀の時には、薬物を服用し、導引などの修行を行う。
- 160 紅潤：赤く光沢がある。
- 161 因循：延期する。
- 162 長春：県の名、今の吉林農安県北。
- 163 宣政：北宋徽宗の年号である宣和（二二一一—二二二五）、政和（二二一一—二二一二）の略称。
- 164 内府：皇室の倉庫。

2. 22 溺死の鬼

澤州164に針工165有り。一日人定166の後、方に針を関する次、聞けり、「人の濠167に沿ひて上來し喜笑して曰く、『明日替ふるを得たり矣。』人替ふる者は誰為るかを問ふ。曰く、『一走卒168の真定169自170(よ)り繖を肩にし書夾を挿して、濠中に來りて浴すれば、我替ふるを得れり矣』と。針工門を出でて望むに、見る所無く、其の鬼為るを知る。明日門首171に立ちて之を待つ。早食の後、一疾卒の繖と書夾とを針工の家に留め、「濠中に往きて浴せんと欲す」と云ふ。針工之に問へば、則ち真定從172(よ)り來れるなり。因りて卒の為に言ふ、「城中浴室有り、請ふ措背173錢を以て相助けんことを」と。卒其の故を問ふ。工具に昨の聞く所を以て告ぐに、辭謝すること再三にして去る。其の夕の二更174の後、瓦礫を門に擲ち大罵するもの有りて曰く、「我辛苦して替るを得たるに、卻て此の賊の壞卻するところと為る。我れ汝を水中に拽かんことを誓ふ」と。明日、瓦礫の堆を見る。數夕罷まず。此の人遷居して之を避く。秘水175の焦符村説けり。

溺死の幽霊

沢州に仕立屋がいた。ある日、人が寝静まったあと、ちょうど針を確認していた時、次のようなことを聞いた。ある人が掘割に沿ってやってきて、喜び笑って言った、「明日、代わりのものが手に入ることになった」と。別の人が、代わりのものは誰なのかを聞くと、「二人の使い走りが、真定から、

- 164 澤州：治所は今の山西省晋城県。
- 165 針工：針仕事をする人。
- 166 人定：夜遅く、人が寝静まった時。
- 167 濠：城郭都市の周囲を巡る掘割、護城河。
- 168 走卒：役所の使用人。
- 169 真定：金の府の名、今の河北正定。
- 170 門首：門口、門前。
- 171 措背：背中を擦る。
- 172 二更：夜の九時から十一時。

傘を肩にして書類バサミを脇に挟んで、掘割にやってきて水浴するので、わたしは代わりのものが手に入るのだ」と。仕立屋は城門を出て見てみたが、何も見えなかつたので、それが幽霊であることを知った。翌日、城門の入り口に立って待っていた。朝食を食べた後、一人の病気の使い走りが傘と書類バサミを仕立屋の家に置いて、「掘割に行つて水浴しようと思つ」と言った。仕立屋が聞くと、真定から來ましたという。それで使い走りのために言った、「街には浴室がある。どうか風呂代を援助させてほしい」と。使い走りは理由を聞いた。仕立屋は事細かに聞いた内容を彼に告げたが、彼は何度も断つて去つていった。その日の晩、九時を過ぎてから、瓦礫を城門に投げつけ大声で罵るものが出て、こつ言つた、「苦勞して代わりのものを手に入れたのに、こいつにダメにされた。わたしは誓つてお前を水中に引き込んでやる」と。よく朝、瓦礫の山を見た。數晩、これが続いた。仕立屋は引越して難を避けた。秘水175(密水?)の焦符村が語つたことである。

2. 23 棗州學の鬼婦

王右司仲澤176、少き日棗州177の學178に住む。廚人179告げて言ふ、「一婦人の鬼、毎夜來りて攪擾180し、睡るを得ず」と。澤言ふ、「今夕若し復た來たらば、汝其の衣を挫181(つか)み大叫せよ、我輩往きて之を視ん」と。其の夜果して來り、其の人其の臂を把りて放さず、因りて大叫す。諸生182燈183を持して往きて之を視るに、乃ち一古棺板なり。之を焚きて、而して怪遂に

- 173 密水：一名、高密河。今の山東諸城市東北の百尺河。
- 174 王仲澤：王渥、字は仲沢、太原の人。興定二年(二二二八)の進士、官は尚書省令史に至る。枢密院経歴官、権右司郎中であつた。
- 175 棗州：治所は今の山東省惠民県。
- 176 州學：州に設置された学校。
- 177 廚人：調理師。
- 178 攪擾：騒がす。
- 179 諸生：知識学問のある人物たち。多くの儒生。
- 180 燈：ともしび、ランプ。

絶ゆ。仲澤説けり。

棗州の州學の夫人の幽霊

権右司郎中の王仲沢どのは、若い頃、棗州の州學(州の学校)に住んでいた。州學の調理師がこう言った、「一婦人の幽霊が、毎晩やってきて騒がし、眠れません」と。王仲沢はこう言った、「今晩もまたやってきたら、お前は幽霊の服を掴んで大声を上げろ。我らが行って見てやるう」と。その晩はたして幽霊が現れ、調理師は幽霊の肩を掴んで離さず、大声をあげた。学生たちは灯火を下げて駆けつけて見ると、なんと、一枚の古い棺桶の板であった。それを燃やすと怪異はついに絶えた。仲沢が述べたことである。

2. 24 湯盤 周鼎

秀岩¹⁸²の安常、字は順之、常(かつ)て党承旨¹⁸³に従ひて大家¹⁸⁴を學び、多く古文¹⁸⁵奇字¹⁸⁶を識る。太和¹⁸⁷の末、嘗て内府¹⁸⁸藏する所の湯盤¹⁸⁹を見るに、白三¹⁹⁰の方斗を作し、四小寸に近く、底に九字を銘す。即ち「徳は日に新たに、又た日に新たに、日に新たに」¹⁹¹なる者也。章宗旨有りて之を辨せ令む。又一方鼎¹⁹²、耳二、足四、饗饗¹⁹³の象 雷文¹⁹⁴中に在り。銘に

云ふ、「魯公文王¹⁹⁵尊彝¹⁹⁶を作る」¹⁹⁷と。銅既に古く、瑩たること碧玉¹⁹⁸の如く、復た銅性無し矣。

湯盤 周鼎

秀岩の安常、字順之は、以前、党懷英に大家の書法を學び、古文、奇字を多く識つていた。太和年間(一一〇一—一一〇八)の末に、宮廷倉庫に所藏された湯盤を見たが、白玉の四角い枘形で、四寸弱の大ききで、底に九字の銘があり、「徳は日に新たに、又た日に新たに、日に新たに」というものであった。章宗(在位一一八九—一二〇八)が命じて釈文を作成させた。また、方鼎で、耳が二つ、足が四つ、饗饗文が雷文中にあるものが一つあった。銘には「魯公が文王の尊彝を作る」とある。銅は古く、碧玉のように輝き、銅の性質は全くななくなっていた。

2. 25 蓮十三花

¹⁸¹ 秀岩：県の名、今の遼寧秀岩県。
¹⁸² 党承旨：党懷英、字は世傑、文章がうまく、書法は篆籀に優れていた。承安年間(一一九六—一二〇〇)に翰林学士承旨となった。
¹⁸³ 大家：漢字の書体。周の宣王の時に史籀が造ったとされる。籀文、籀書ともいう。秦の時に大家と呼ばれ、小篆と区別された。
¹⁸⁴ 古文：甲骨文、金文、籀文と戦国時代に六国で通行した文字の総称。
¹⁸⁵ 奇字：漢の王莽時代の六体書の一つ。概ね古文に改変を加えたもの。『隋書』經籍志「漢時以六體教學童、有古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲鳥」
¹⁸⁶ 太和：金の章宗完顔璟の年号(一一〇一—一一〇八)、即ち「泰和」である。
¹⁸⁷ 内府：王室の倉庫。
¹⁸⁸ 湯盤：『禮記』大學「湯之盤銘曰：苟日新、日日新、又日新」。
¹⁸⁹ 白三：白玉か。

¹⁹⁰ 「徳日新」は『尚書』仲虺之誥の言葉。
¹⁹¹ 方鼎：両耳四足の方形の食器。商周時代に流行し、祭器とされた。
¹⁹² 饗饗：伝説中の食の悪戯。青銅器の鐘鼎彝器上にその頭部の形状を裝飾として彫刻することが多い。
¹⁹³ 雷紋：雷電の形の紋様。
¹⁹⁴ 文王：周の文王。
¹⁹⁵ 尊彝：尊、彝は共に古代の酒器、金文中で連用して各種酒器の総称とする。また、礼器を指す。
¹⁹⁶ 『宋史』本紀・哲宗・元符二年閏九月「丙戌、果州團練使仲忽進古方鼎、誌曰「魯公作文王尊彝」。」
¹⁹⁷ 碧玉：鉱物の名。鉄を含有する石英石、紅色、褐色、綠色を呈する。

同年²⁵⁸の康良輔説けり、磁州²⁵⁹觀臺²⁶⁰の劉軌の家は、承安(一一九六一—二〇〇)中に、池蓮一莖に十三花を開く。是の歳、軌は登科し。京兆の按察判官に終る。

蓮十三花

わたしと科挙で同年合格の康良輔が述べたことである。磁州觀臺の劉軌の家では、承安年間(一一九六一—二〇〇)に、池の蓮の一莖に十三の花が咲いた。この歳、劉軌は科挙に合格し、官位は京兆の按察判官に至った。

2. 26 瑞禾

鳳翔號縣²⁶¹の太子莊は、庚子の歳²⁶²、郝氏の穀田八十畝に、每莖一葉一小穂なるに、十二もて數へ、並びに大穂は十三為るに至る。試みに一叢を割りて之を治むるに、穀十升を得たり。明年、郝使²⁶³は萬人を統軍し、金虎符²⁶⁴を佩す。偏將²⁶⁵李愷曾て見る。古に一莖九穂有るも、蓋し是くの如きの多きにあらざる也。

めでたい稲

鳳翔號縣の太子莊は、庚子の歳(一二四〇、太宗オゴデイ二年)に、郝氏の稲田八十畝で、一本の莖に一つの葉と一つの小穂が普通であるが、十二も穂が付き、大きな場合、十三も穂が出る稲もあった。試しに一かたまりの稲を田んぼに割り当てて育てたところ、十升の収穫があった。明年、郝和尚拔都(一二二五—二)は一万人の軍隊のトップとなり、金虎符を拝領した。副將の李愷が以前見たとのことである。古代では一つの莖に九穂が着いたのがあったとするが、おそらく、これほど多いものではなかったであろう。

2. 27 黃真人

修武²⁶⁶の張袞、字は君冕、其の父は仲和、少き日府史²⁶⁷と為り、仙に祈るを好む。一日、黃繡緯²⁶⁸降り、因りて留めて之に事ふ、之を黃真人²⁶⁹と謂ふ。筆畫²⁷⁰像を前に懸け、毎事之に禱る。君冕は崇慶²⁷¹二年簾試²⁷²に赴く。仲和問ひて云ふ、「兒子試に入る²⁷³に、御題聞²⁷⁴き得たる乎」と。批²⁷⁵して曰く、

²⁵⁸ 同年：科挙で、同じ科で同年に合格したものが互いを呼ぶ呼称。元好問は金の宣宗興定五年(一二二二)に科挙に合格した。

²⁵⁹ 磁州：治所は今の河南省磁県。

²⁶⁰ 河北省邯鄲市磁県西南部に位置する觀台鎮の北には土台があり、三国時代の曹操が関兵のために建てたとされ、觀台と呼ばれている。

²⁶¹ 鳳翔號縣：鳳翔、今の陝西省鳳翔県。金代では鳳翔府で、號縣を所轄した。號縣は今の陝西省宝鸡県の東五十里。

²⁶² 庚子歳：一二四〇年。

²⁶³ 『元史』卷一五〇「郝和尚拔都、太原人、以小字行、幼為蒙古兵所掠、在郡王迄忒摩下、長通譯語、善騎射。…庚子歳、太宗於行在所命解衣數其瘡痕二十、嘉其勞、進拜宣德西京太原平陽延安五路萬戶、易佩金虎符、以兵一萬屬之、復賜馬六騎、金錦弓鎧有差。」郝和尚拔都の息子の郝天挺は、元朝の高官で、元好問に師事し、元好問撰『唐詩鼓吹』十卷に注を施している。

²⁶⁴ 金虎符：軍隊を派遣する、あるいは身分を証明する証明書。『元史』兵志一

²⁶⁵ 「萬戸佩金虎符。符狀為伏虎形、首為明珠、而有三珠、二珠、一珠之別。」

²⁶⁶ 偏將：副將。

²⁶⁷ 修武：県の名、河南省西北部。

²⁶⁸ 府史：財貨や文書の出納を管理する役人。

²⁶⁹ 黃繡緯：唐の玄宗朝の道士。

²⁷⁰ 真人：道家で本性を養い或いは真理を探求して道を会得した人。また、仙人となった人の総称。

²⁷¹ 筆畫：筆で描いた絵画。

²⁷² 崇慶：金の衛紹王完顔永濟の年号(一二二二—三)。

²⁷³ 簾試：殿試。

²⁷⁴ 入試：試験場に入り科挙を受験する。

²⁷⁵ 御題：天子が命じた科挙の詩文の題目。

²⁷⁶ 批：書面で指示する。

「天機²¹⁶は容(まさ)に洩らすべからず」と。試期²¹⁷の過ぐるに及び、之に問ふに、即ち批して云ふ、「臣作股肱弼予違賦、成績紀太常詩」と。又た問ふ、「兒は登策²¹⁸するや否や」と。批して曰く、「黃裳頭²¹⁹、緑衣尾²²⁰」と。張解せず、之を解かんことを請ふに、又た批して曰く、「天機は容に洩らすべからず」と。四月に及び、唱名²²¹に當りて、張又た問ふ、「榜²²²旦夕に至らん。幸(ねが)はくは先に之を告げよ」と。即ち批して云ふ、「緑衣は、六衣也、君冕の名に非ざる乎」と。榜の至るに及び、黃吉甫は眞の第一人にして、而して君冕の名は最も下なり。此の類甚だ多し。亦た俳諧²²³詩有り、笑ふべし²²⁴。

黄真人

修武の張袞は、字は君冕で、彼の父は仲和であった。張仲和は若い頃、府史(役所の出納係)となり、仙人への祈願を好んで行った。ある日、唐代の道士である黃縉²²⁵が降臨したので、地上に留まってもらいお仕えることにした。彼を黄真人と言う。筆で描いた真人の画像を前に掛けて、ことあるごとに祈りを捧げた。息子の張君冕は崇慶二年(一一三三)に殿試に赴いた。張仲和が質問した、「我が子が試験を受けます。殿試の試験問題

²¹⁶ 天機：天の機密、天意。
²¹⁷ 不容：許されない。
²¹⁸ 試期：試験の日時。
²¹⁹ 登策：科擧での合格。
²²⁰ 黄裳：正妻。『詩経』邶風・緑衣「緑分衣兮、緑衣黃裳。」鄭玄箋「婦人之服、不殊衣裳、上下同色。今衣黑而裳黃、喻乱嫡妾之礼。」
²²¹ 緑衣：『詩経』邶風・緑衣「緑分衣兮、緑衣黃裳。」この詩は、衛の莊姜が自分自身を傷んだ詩とされる。古代では黄が正色、緑が間色であり、間色を衣にし、黄色を裏地にすることは、秩序の転倒を意味した。後に「緑衣」は正室が地位を失う典故となった。
²²² 唱名：合格者の姓名を公に宣言すること。
²²³ 榜：試験結果を告示する名簿。
²²⁴ 俳諧：滑稽な言動、ふざけること。

を伺うことは可能でしょうか。黄真人は回答した、「機密事項は漏洩すべきない」。試験時期が過ぎて、質問すると、直ちに回答があった、「試験問題は、『臣作股肱弼予違賦』と『成績紀太常詩』である」。さらに質問した、「我が子は合格しますか」。回答は、「黄裳が頭、緑衣が尾」で、張仲和は理解できなかった。解き明かしてくれるよう要請すると、回答は、「機密事項は漏洩すべきない」であった。四月になり、合格者発表に当たって、張仲和はさらに質問した、「合格名簿は間もなく到着します。先に内容を知らせていただけませんか」。直ちに回答があった、「緑衣は、六衣である。張君冕の名『袞』ではないか」と。合格名簿が到着すると、黄吉甫が本当のトップ合格で、張君冕の名は最下位であった。この種の話は極めて多い。諧謔の詩もあり、面白い。

2. 28 摩利支天咒

忻州²²⁶劉軍判は、貞祐²²⁷の初、朔方²²⁸の人馬動²²⁹くを聞き、家にて摩利支天²³⁰咒を誦す。州の陥つるに及び、二十五口俱に兵禍²³¹を免る。獨だ一奴のみ信ぜず、迫りて城を圍まれ始めて之を誦すに、虜とさ破ること四五日なるも亦た逃歸す。南渡の後、永寧²³²に居し、即ち此の咒を施す。文士²³³の

²²⁶ 可笑：おかしい。おもしろい。
²²⁷ 忻州：今の山西省忻州市。
²²⁸ 貞祐：金の宣宗完顔珣の年号(一一三三—一一三六)。
²²⁹ 朔方：北方。
²³⁰ 朔方人馬動：モンゴル軍が忻州以北の地区に侵入したことをいう。
²³¹ 摩利支天：摩利支天(梵名Mṛtīdevī)、また、摩里支天、末利支天。意識は積光、威光、陽焰等。かげろう、日の光を意味することばで、その性格化。自らは姿を見せないが、この神を念ずると、他人はその人を見ず、知らず、害することなく、欺くことなく、縛することなく、罰することがない、という。
²³² 咒：呪文。密宗の真言。
²³³ 兵禍：戦争の災厄。
²³⁴ 永寧：金の県の名、治所は今の河南省洛寧県。
²³⁵ 文士：文学に優れた人物。

薛曼卿²³⁵其の事を記す。

摩利支天咒

忻州の劉軍判は、貞祐年間（二二二—二二六）の初め、北方で人馬の動きがある（モンゴル軍の金国への侵入）と聞いて、自宅で摩利支天咒を唱えた。忻州の陥落するに及んで、二十五人の家族はみな戦火を免れた。ただ一人の奴隷だけが信用せず、モンゴル軍が迫って忻州が包囲されて初めて摩利支天咒を唱えると、捕虜とされること四五日であったが逃亡して家に帰ることになった。金国が都を中都から汴京に移したのち、劉軍判は永寧に居住すると、すぐに摩利支天咒を人々に授けた。文学者の薛曼卿がこのことを記録している。

2. 29 王叟の陰徳

穰縣²³⁵宋莊の王叟は、人目して王評事²³⁶と為す。身は年八十一、婦は八十、四子にして、孫二十餘人有り、曾孫も亦た婦を娶る。叟自（よ）り其の會に至る、凡そ三十六房にして、夫婦は皆な結髮²³⁷で、戸を推して縣中第一為り。第四子の榮は、軍功を以て宣武軍魯山尉に官たり、長孫は武舉に中（あたり）り、某州巡檢たり。宋莊の四區の宅前の大槐は、數百年の物

²³⁵ 薛曼卿：薛繼先、字は曼卿、猗氏（今の山西臨猗県に所属する）の人、後に洛

²³⁶ 西山中に隱居した。『中州集』卷九に伝記がある。

²³⁷ 穰縣：今の河南鄧県外城東南隅にあつた。

²³⁸ 評事：もともと裁判を司る官職名。ここでは通称。

²³⁹ 結髮夫妻：成年に達してすぐに結婚した夫妻。

²⁴⁰ 鎮平：県の名、河南省に所属する。元好問は二二二—二二六、三十七歳の時に、鎮

²⁴¹ 平県令に任ぜられた。

²⁴² 康健：健康。

²⁴³ 陰徳：密かに行う有徳の行為。

²⁴⁴ 診治：診断治療。

²⁴⁵ 病家：病人の家庭、病人と病人の家族。

にして、老幹は已に枯るるも、而るに五枝は内向し、各おの大樹を成し、陰は數十歩。予鎮平²⁴⁶に在るの日、嘗て其の家を過り、其の康健²⁴⁷にして六十許りの如きを見る。人は、必ず陰徳²⁴⁸有りて然るを致すと謂ひ、之に問ふも答へず。旁の一叟云ふ、「王評事は年高しと雖も、乃ほ診治²⁴⁹を以て生と為す。病家²⁵⁰來り請へば、馬に上（の）りて去（い）き、僮僕²⁵¹を以て自ら隨はしめず。人の為に處方し、一薬も備へず、以て和劑せず。貧家²⁵²に患を調べ、夏月日に二、三たび往き、倦まず、病既に平ぐも、一錢も責めず。此れ陰徳に非ざる耶」と。叟乃ち肯て自ら言ふ、「今商販の家臨洮²⁵³山自（よ）り外、長耳²⁵⁴を以て甘草を負ひて來るに、塵垢²⁵⁵糞穢²⁵⁶、何の有せざる所ぞ。之を藥肆中に卸し、隨即²⁵⁷判して以て人に與ふ。某は毎に此の草を用ひ、必ず水を以て洗濯²⁵⁸し、暴曬²⁵⁹すること法の如くし、然る後に和藥²⁶⁰す。他品も悉く然り。敢て自ら陰徳を為すに非ず、但だ心の安んずる所、爾（しか）らざるること能はざる也」と。予酒を酌みて之に與へて曰く、「此れ公の陰徳の大なり矣」。

王叟の陰徳

穰縣宋莊の王叟は、人々から王評事と呼ばれていた。年齢は八十一歳で、夫人は八十歳、子供は四人で、孫は二十数人おり、ひ孫も結婚していた。

²⁴⁶ 上馬：馬に騎乗する。

²⁴⁷ 康健：下僕。

²⁴⁸ 貧家：貧乏な家。

²⁴⁹ 臨洮：県の名、甘肅省東部にあり。

²⁵⁰ 長耳：ロバ。

²⁵¹ 塵垢：灰塵と汚れ。

²⁵² 糞穢：汚物。

²⁵³ 隨即：直ちに、即刻。

²⁵⁴ 洗濯：洗い濯ぐ。

²⁵⁵ 暴曬：日光に干し乾燥させる。

²⁵⁶ 和藥：薬物を調剤する。

王叟からひ孫まで、全部で三十六の家族がおり、どの夫婦も成人すると同時に結婚しており、県の中で第一の家とされていた。四男の榮は、軍事的功績で宣武軍魯山尉になり、年長の孫は武挙に合格し、ある州の巡検になった。宋荘の四区の住宅前の大きな槐は、数百年の大樹で、老いた幹はすでに枯れていたが、五つの枝は内向きに伸びて、それぞれが大樹となり、その陰は数十歩の広さであった。わたしは鎮平に滞在していた時、その家を訪問すると、王叟は健康で六十数歳にしか見えなかった。王叟は陰徳があるので健康で若いのだと人々は言ったが、王叟に質問しても答えなかった。近所の老人がこう言った、「王評事は高齢ではあるが、今も診察治療を生業にしている。病人の家族から依頼があると、馬に乗って出かけ、召使は同行させなかった。他人の為に薬を処方し、自分では薬を一つも準備せず、薬の調合も行わなかった。貧乏な家に対しては、患者の様子を調べ、夏には日に二、三回も訪問し、倦むことがなかった。病気が治っても、費用を請求しなかった。これこそ陰徳ではないか」と。王叟はそこであえて自分から言った、「今商人の家では、臨洮山より向こうでは、ロバに甘草を積んでくるが、ホコリだらけで不潔な物も混じり、何でもありだ。これを薬屋に下ろして、薬屋ではすぐに切り刻んで販売している。私はいつもこの草を用いているが、必ず水できれいに洗い、規程通りに乾かして、そのあとで薬にする。他の薬品も同様である。あえて自ら陰徳を積もうとしているのではない。ただ心の休まるようにしており、そうでないことはないのではないか」と。わたしは酒を酌んで王叟に与えてこう言った、「これ

- 255 武安県：今の河北省西南部。
 256 池館：池と庭を有する屋敷。
 257 野色：原野或いは郊外の風景。
 258 林光：樹木を透過した陽光。
 259 物色：景色。
 260 煙霞：霧、雲と霞。
 261 蓬島：蓬萊山。
 262 武陵：郡の名、今の湖南省常德県西。

こそ、あなたの陰徳の大きさです」。

2. 30 馮婦の詩

武安縣263新安の農の馮氏は病後、忽ち一詩を道264(い)ひて云ふ、「城南池館265 夾蒲の津、野色266 林光267 物色268 真なり。滿目の烟霞269 蓬島270 遠く、一溪の花木武陵271の春」と。太和272末に病卒す。胡國瑞273説けり。

馮婦の詩

武安縣新安の農婦の馮氏は病氣の後、急に詩を口ずさんだ、「城南池館夾蒲の津、野色林光物色真なり。滿目の煙霞蓬島遠く、一溪の花木武陵の春。(城郭の南に位置する庭園のある居館は、夾蒲の津に面し、そこから広がる野原の様子、樹々の木漏れ日など、風景は本当に素晴らしい。見渡す限りかすみに含まれた風景のはるか彼方に、仙人のすむ蓬萊島が微かに見える。溪谷中には花を咲かせた草木が広がり、まるで陶淵明「桃花源記」に描かれた武陵の仙境のようである。)- 泰和年間(二二〇一-二二〇八)の末に病氣で亡くなった。胡國瑞が述べた話である。

2. 31 石中の龜

金門274の羽客275李鍊師276は、和順277の人なり。嘗て章廟278の召す所と為り、

- 263 太和：泰和、金の章宗完顔璟の年号(二二〇一-二二〇八)。
 264 金門：今の河南汲県の県治。
 265 羽客：道士の別称。
 266 鍊師：道士で、「養生」、「煉丹」の法を会得したものを、尊んで「鍊師」と呼んだ。
 267 和順：県の名、山西省東部太行山区にあった。
 268 章廟：金の章宗完顔璟(一一六八-一二〇八)。

提點ていけん天長觀たり。平生靈異れいぎありて、「金盃 水を出す」の類の如き甚だ多く、八十一事に至りて、邢州じやうしゅう神霄宮の壁間に圖けり。門人もんじん王守中、又た碑に刻して以て傳へんと欲す。匠者じやうしやを召して石を攻めしむ。石中に一龜を得、日ひび几案きあんの間に在りて馴狎じゆんげつす。是こゝ(か)くの如きこと百日にして、風過ぎ、所在を失ふ。武安の王安卿説けり。

石中の龜

金門の道士である李鍊師は、和順の人で、以前、金の章宗皇帝に召され、提点天長觀という官職に着いた。普段から不思議な現象があり、「金盃が水を出す」という類のものが甚だ多く、八十一事にも至り、このことは邢州の神霄宮の壁に描かれている。門人の王守中は、さらに碑文に刻して広く伝えようとした。石工を呼んで石を加工させた。石の中から一匹の龜を手に入れた、毎日、机に置いて可愛がった。このようにして百日が経ったところ、風が吹いて、行方がわからなくなった。武安の王安卿が述べたことである。

2. 32 石中臺

³²⁶ 提點：官名。宋で始めて置かれ、司法、刑罰、河川事務などを司った。金では
³²⁷ 近侍局に提點が置かれた。
³²⁸ 靈異：神奇な怪異。
³²⁹ 邢州：治所は今の河北邢台。
³³⁰ 門人：弟子。
³³¹ 匠者：木工、職人。
³³² 几案：テーブル。
³³³ 馴狎：珍重して、なで弄ぶ。
³³⁴ 長葛：県の名、河南省中部にあり。
³³⁵ 禹冀之：道士、元好問の知り合い。 本書卷一「單州民妻」の篇末の作者自注
³³⁶ に「黃冠禹冀之説」という。
³³⁷ 遂平：県の名、今の河南省中部やや南。

長葛ちやうかの禹冀之うぎし、華山の隱者薛自然に見ゆるに説けり、「太和中、華山の石工二石を破り、石中の一墓跳出し、尋いで水中に入れり」と。

石中の墓

長葛の禹冀之が、華山の隱者薛自然にあつたときに、薛自然は次のように言つた、「泰和年間（二二〇—二一〇八）に、華山の石工が一つの石を割つたところ、石の中から一匹の墓（ガマ）が飛び出して、水中に入った」と。

2. 33 高監の償債

遂平すいへい鬪城鎮の高監は、初めて鬪城に到り、富民ふじん高氏に就きて相い紹繼せうけいせんことを求む。高氏は農民にして、淳質じゆんしつ、其の術中に墮つ。借る所の錢麥は積むこと數百緡じゆはく、後に百方ひやくはう詆欺ていけいし、一錢も償はず。未だ幾くならずして高監死す。一赤犢を生むに、腹下の白毛字を成して云ふ、「償を還すかへ人高都監たかづなり」と。時に武州ぶしゅうの人吳成可ごせいこ鄜時ふじの丞を罷め、此の鎮に閑居かんこし、「牛報文」を作る。

高監の借金返済

³³⁸ 富民：富裕な民。
³³⁹ 紹繼：ここでは養子にする。
³⁴⁰ 淳質：純粹質朴。
³⁴¹ 緡：錢一千文。
³⁴² 百方：多くの手段。
³⁴³ 詆欺：誹謗中傷する。
³⁴⁴ 還債：借金を返す。
³⁴⁵ 都監：官名。宋は、諸路、州、府にすべて兵馬都監を設置し、「都監」と略称した。
³⁴⁶ 武州：治所は今の山西省神池県東北。
³⁴⁷ 鄜時：金の地名、今の陝西洛川県南。
³⁴⁸ 閑居：人を避けて独居する。

遂平鬪城鎮の高監は、鬪城にやってきたばかりで、裕福な農民の高氏に養子となることを申し入れた。高氏は農民で、性質は純朴、高監の術中に落ちてしまった。高監が借りた金銭や表は数百緡にもなり、後に様々な手段を用いて相手を非難し、一銭も返さなかった。間も無くして高監は死んだ。一匹の赤い子牛が生まれたが、その腹の下の白毛は文字になっていて、「借金を返済する高都監である」と読めた。当時、武州出身の吳成可が鄺時の丞を罷めて、この鎮で人目を避けて静かな生活をしており、「牛の報いの文」を作った。

2. 34 范元質 牛訟を決す²³⁰

范元質は平輿²³¹に令たり。函頭村の彭李家は、兄弟皆な財に豪たり。彭李三の水牯²³²、一犢を生み、數日にして死し、水中に棄つ。鄰の張氏の水牯も亦た一犢を生む。李三は牧兒²³³の誘ふ所と為り、張の犢を竊み去り、其の家の水牯をして之に乳せ令む。張家之を撻ち、遂に張に告げて曰く、「李家の犢死して、水中に投ず。今乳する所は、君が家の犢也。君官に告げよ、我往きて證せん」と。張之を官に愬ふ。元質曰く、「此れ難からず」と。命じて新水²³⁴を兩盆に汲ましめ、兩牛の耳の尖を刺せば、血は水中に瀝(した)り、二血殊に相入れず。又た犢の子を捉へ亦た之を刺せば、犢の血水上に瀝り、隨ひて張の牛の血と相入りて凝る。即ち犢を以て張氏に歸す。縣は神明²³⁵を稱せらる。元質、名は天保、磁州²³⁶の人。進士の趙公祥親しく見る。

²³⁰ 決訟：裁判の案件に判決を下す。

²³¹ 平輿：県の名、今の河南省汝南県東南。

²³² 水牯：雌の水牛。

²³³ 牧兒：牧童。

²³⁴ 新水：新しく汲んだ水。

²³⁵ 神明：神の如き明察。

²³⁶ 磁州：治所は今の河北省磁県。

²³⁷ 刻木：木に雕刻する。

范元質 牛の裁判に判決を下す

范元質は平輿県の県令となった。函頭村の彭李家は、兄弟みな財産家であった。彭李三の水牛が子牛を一匹生んだが、数日で死に、水中に投棄した。鄰の張氏の水牛も子牛を一匹生んだ。李三は牧童に唆されて、張の子牛を盗み、自分の家の水牛に乳を与えさせた。張家のものが牧童を鞭打つたので、結局張に白状して言った、「彭李家の子牛が死に、水中に投棄しました。今授乳している子牛は、張家の子牛です。お上に訴えてください。わたしが証明します」と。張はこの件を官に訴えた。范元質は言った、「この件は難しくない」と。新しい水を二つの盆に汲ませ、二頭の親牛の耳の先を傷つけると、血が水中にしたたが、二つの血は全く混らなかつた。さらに子牛を捉へて傷つけると、子牛の血は水上に滴り、張の牛の血と混じって凝固した。直ちに子牛を張氏に返還した。県令は神の如く明察であると称賛された。元質、名は天保、磁州の人。進士の趙公祥が自ら見たことである。

2. 35 賈叟の刻木²³⁸

平陽²³⁹の賈叟は、目無くして能く神像を刻めば、人待詔²⁴⁰を以て之を目す。交城の縣中寺²⁴¹の一佛は、是れ其の刻む所にして、儀相²⁴²端嚴²⁴³たり。

²³⁸ 平陽：今の山西省臨汾市。

²³⁹ 待詔：唐代では内廷に仕える医者や画家などの技術者を待詔と呼んだ。宋元代では、民間の手工芸技術者を尊んで待詔と呼んだ。

²⁴⁰ 交城縣中寺：交城は今の山西省交城県。縣中寺は玄中寺で、石壁寺とも呼ばれた。

²⁴¹ 儀相：風采、容貌。

²⁴² 端嚴：莊嚴。

僧説けり、「賈は初め木胎³⁰³を立て、先づ之を摸索³⁰⁴す。意會する所有りて、斤を連ぬること風の如し」と。予因りて記すに、趙州³⁰⁵の没眼僧、能く墨水を喫³⁰⁶（ふ）きて畫き、上に五彩を布くも亦た之を喫く。毛提擧³⁰⁷家の一虎、大樹の下に蹲り、旁に一青彪臥すに、虎の目は爍爍³⁰⁸として金の如く、之を望めば毛髮森立³⁰⁹す。趙邈齋³¹⁰と雖も是れを過ぎず。佛氏の所謂六根³¹¹互用³¹²せる者は、殆んど是從（上）り進める耶。

賈叟の彫刻

平陽の賈叟は、盲目であるのに、神像の彫刻を得意としており、待詔（皇帝に使える技術者）にふさわしい人物であると尊敬されていた。交城の県中寺の仏像一体は、彼が彫刻したもので、姿形が莊嚴であった。僧が言った、「賈叟は最初素材の材木を立て、それをを手で撫でる。心中會得するものがあつてから、オノを風のように素早く振るう」と。因みに、これに関連して記述すると、趙州の盲目僧は、墨を口から吹き出して絵を描くことが上手く、その上に彩色を施す場合も口から絵具を吐き出して描いた。毛提擧の家の絵画の場合、一匹の虎が大樹の下に蹲っており、旁に一匹の青彪が臥しているが、虎の目は金のように光輝き、それを見ると総毛立つほ

303 木胎：木製の骨組み。
304 摸索：手で撫でさする。
305 趙州：今の河北趙県。
306 喫：口から水を噴き出す。
307 毛提擧：元好問の岳父毛端卿（一一五六一一二二五）、字は飛卿、彰城（今の江蘇省徐州市）の人、提擧権貴司に任ぜられた。
308 爍爍：光世が煌々さま。
309 森立：そびえ立つ。
310 趙邈齋：北宋前期の民間画家、虎の絵に優れること有名。その名は伝わらず、邈齋（ひどく汚らしい）は彼のあだ名。「齋は一に「卓」に作る。
311 六根：眼、耳、鼻、舌、身、意を指す。根は「能く生ずる」という意味。外界の刺激によつて感覚を生み出す器官。
312 互用：相互に運用する。

どであつた。虎の絵で有名な北宋前期の画家趙邈齋であつても及ばない作品である。仏教でいわゆる六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）の相互作用とというのは、おそらくここから進んだものであろうか。

2. 36 閻大 婦に憑きて語る

穰縣³¹³の孫莊の農民閻大は、正大³¹⁴中に、相里³¹⁵の劉進と商洛³¹⁶に往きて牛を買ふに、而るに閻は病死す。劉は書を以て其の家に報ず。閻の母と婦とは所居³¹⁷の前に望祭³¹⁸するに、回風³¹⁹の紙灰³²⁰を吹きて西南莊に往く有り。此の莊は是れ閻の小婦³²¹の所居にして、相去ること五六里。之を少（しば）らくして、人の來りて報ずる有り、閻大は婦に憑きて語り、母妻と相見えんと欲すと。母妻奔往し、相持³²²して哭し、問ふ、「汝何ゆえに死するや」と。曰く、「我が死は天命なり、但だ劉進の欺むく所と為るのみ、先づ此に相告ぐ。某（われ）の牛、價幾何は、絹若干を用てす。某の牛、價幾何は、銀若干を用てす。彼は我れ死して證無きに乗じ、相欺昧³²³せんと欲する耳」と。布金の價直³²⁴、皆な筆を以て之を記せ令む。又云ふ、「此の人情理³²⁵耐

313 穰縣：今の河南鄧県の外城東南隅にあつた。
314 正大：金の哀宗の年号（一二二四―一二三二）。
315 相里：同郷。
316 商洛：金の鎮名、今の陝西商東八十五里。
317 所居：住宅、住い。
318 望祭：遙祭。遠くに向けて祭礼を行う。
319 回風：旋風。
320 紙灰：紙錢を焼いた灰。
321 小婦：妾。
322 相持：相互に支える。抱きかかえる。
323 欺昧：欺瞞。
324 價直：価格、値段。
325 情理：人情と道理。

ふ可からず、我已に死し、渠(かれ)布絹有るも、乃ち行纏を以て我が面を蔽へり」と。傍の一屠者云ふ、「汝我に肉錢若干を欠く、汝が家は汝の死するを以て、遂に見(われ)に還さず、今我をして取還せ令む」と。閻俯首すること之を久しくして、屠を仰視して云ふ、「我已に死せり、更に甚(なに)を理會せん」と。觀る者大笑す。他日、劉進家に反る。人説向して云ふ、「閻大に靈有りて、先に價直を以て其の家に告げり矣」と。進は其の母に見ゆるに、一錢も取て焉を欺かず。致遠は閻と一村落にして、為に言ふこと此くの如し。此れ正大中の黥卒石貴の事と同じくす。貴の死後、一男子に憑き、舞陽縣の吏の徴債に就きて、司農卿張公に訴ふ。其の事を異とし、部掾王仲寬に命じて為に理(おき)めしむ、貴には文券の憑(よ)る可き有りて、立ちどころに命じて之を還せしむ。

閻大が妾に取り憑いて語る

穰県の孫莊の農民閻大は、正大年間(二二四三二)中に、同郷の劉進と商洛鎮に行き、牛を買ったところ、閻大は病死してしまった。劉進は手紙を書いて、閻大の家に知らせた。閻大の母と夫人は住居の前で、遠方で亡くなった閻大を吊っていると、旋風が吹いて紙銭の灰を巻き上げ、西南莊まで運んで行った。この莊(むら)は閻大の妾の住まいで、閻大の家から五六里離れていた。しばらくして、西南莊から人がきて、閻大は妾に取り憑いて話し、母や妻と会いたいと言っていますとの知らせがあった。母と妻は走って西南莊まで行き、抱き合せて泣き、質問した。「あなたはど

して死んだのですか」と。閻大は答えた、「わたしの死は天命である。ただ劉進に騙されただけで、最初にこのことを言っておく。わたしの牛の値段は、絹ならば若干反である。わたしの牛の値段は、銀ならば若干である。劉進は、わたしが死んで証拠がないことに乗じて、騙そうとしている」と。絹や銀での商品の価値を、全て書き留めさせた。さらに言った、「劉進は、人情や道理を弁えない奴で、わたしが死んでしまったら、手元に麻布、絹布があっても、なんと足に巻きつける布でわたしの顔を覆った」と。そばにいた一人の肉屋が言った、「あなたはわたしに肉代の借金がある。お前の家はお前が死んだことで結局借金を踏み倒し、今わたしに督促させようとしている」と。閻大はしばらく俯いてから、肉屋を仰ぎ見て言った、「わたしはもう死んでしまったので、いまさらどうすることも出来ない」と。見ていたものたちは、大笑いした。後日、劉進が家に帰ると、彼にこう言う人がいた、「閻大には霊があつて、あらかじめ商品の値段を閻大の家のものに告げている」と。劉進は閻大の母に面会したが、一円も騙すようなことをしなかった。致遠は閻大と同じ村の出身であったが、このように述べている。この事件は正大年間中の兵士の石貴の事件と同じであった。石貴は死後に一人の男に取り憑いて、舞陽縣の胥吏の借金返済について、司農卿の張公に訴えた。張公はこの事件を特に重視し、役所の官吏の王仲寬に命じて処理させたところ、石貴には根拠となる書類があつたので、立ちどころに返還させた。

326 不可耐…罵りの言葉。憎たらしい。耐えられない。

327 行纏…足を巻く布。

328 屠者…肉屋。

329 俯首…首を垂れる。

330 仰視…仰ぎ見る。

331 理會…処理する。片付ける。

332 黥卒…宋代では、兵士の顔に黥(刺青)を入れ、逃亡を防いだので、このよう

な呼称がある。

333 舞陽縣…今の河南省中部やや南。

334 徴債…借金を回収する。

335 司農卿…金の宣宗興定六年(二二二二)に司農司を設置した。

336 部掾…郡府に所属する諸曹の属官。

337 文券…契約書。

2. 37 延壽丹³³⁸

神仙辟穀延壽丹、一丸、終身飢えず。光明硃砂³³⁹一兩、飛過³⁴⁰して之を用ゐる。定粉一兩、之を焼きて黄色なる者。白茯苓³⁴¹の雪の如き者一兩、或いは半兩を加ふ。黃丹³⁴²、輕(やや)紅なる者一兩、飛過す。乳香³⁴³七錢³⁴⁴半、水銀三錢、大金箔三十片。白沙蜜一兩。淨蠟一兩を稱り、右各おの精細なる者を選ぶ。先づ定粉を將て乳鉢に入れ研開し、次に水銀を下(い)れ再び研し、直だ水銀の星子³⁴⁵無きを候(ま)ちて度と為す。次に黃丹、硃砂、金箔を下れ、再び研し、次に茯苓、乳香等の細末を下れ同じく研与す。藥を將つて☆³⁴⁶の碗に入れ、熱湯の上に坐(お)き、湯を冷(さま)さ令むる勿れ。別に蜜蠟を將て開鎔し、藥に入れ内に在りて、木匙もて攪与す。取手もて丸める。一兩毎に十二丸子を作り、劑縫有ら令むること勿れ。或いは硃砂或いは水銀を衣と為し、衣と為さざるも亦た可。如し水銀を以て衣と為さんと欲せば、水銀三、二粒を手心内に取り、津唾を用ゐて擦りて青色にし、藥の三、五丸を取りて之を搓(よ)る。合せる時は雞犬、婦

³³⁸ 中華書局本の注記では、清抄本では「延壽丹」「出箭法」の二則に作るとう。

³³⁹ 朱砂：鈹物名。また、「丹砂」、「硃砂」、「辰砂」ともいう。方土が丹藥を製造する主要な原料。また、顔料、薬剤の原料でもある。

³⁴⁰ 飛過：鈹物藥の粉末あるいは顔料を研磨して粉末とし、水に浸して、水面に浮かんだ不純物を取り除くこと。

³⁴¹ 茯苓：松樹の根に寄生する菌類植物、形状は甘薯のようで、外皮は黒褐色、裏面は白色或いはピンク色。漢方では利尿、鎮靜等の作用がある。

³⁴² 黃丹：鉛の酸化物。顔料にし、薬剤にもいれる。

³⁴³ 乳香：本来の名称は薰陸、橄欖科の常緑喬木の凝固した樹脂。滴り落ちて乳頭状になるので、乳頭香ともいう。香の原料とし、薬用にもなる。

³⁴⁴ 錢：重量單位。十分で一錢、十錢で一兩。

³⁴⁵ 星子：細かく砕いたあるいは細小のもの。

³⁴⁶ ☆：土篇に白。未詳。

³⁴⁷ 白麵：小麦粉。

³⁴⁸ 燒餅：小麦粉をこねて丸く平たく焼いたもの。

³⁴⁹ 煎餅：クレープ。

人を忌む。藥成りて、☆の器内に入れ之を貯ふ。如し住食せんと欲せば、先づ油三兩、蠟一兩、白麵一斤を用ゐ、蜜一兩を入れ、燒餅或いは煎餅に和す。如し無くんば、不托³⁵⁰麵或いは糯米粥を食すも亦た可。極飽を須(ま)ちて、然る後に服藥するに、乳香湯を以て一丸を下(い)る。又た一時辰³⁵¹、再び白麵を將て炒熟し、蜜蠟を丸と為し、桐子³⁵²大の如くし、温白湯³⁵³或いは乳香湯に百丸を下(い)れ、名づけて「後藥³⁵⁴」と曰ふ。先づ已に飽食して、又た後藥を服す、故に二三日困せず。困すと雖も亦た傷無し。服藥の後に當に萬緣³⁵⁵染らざるべし。夫れ心動けば則ち氣散じ、語多ければ則ち氣傷む。故に辟穀する者は寧心養氣を以て本と為す、事來れば則ち應じ、事過ぐれば心に留むること勿れ。時時³⁵⁶日に向ひて氣を咽すれば、以て補助と為す。茶湯³⁵⁷は意に任すも、有滓の物を食すること勿れ。怒を忌み、大勞を忌む。十日の後、肌肉³⁵⁸は瘦すと雖も、而るに筋骨³⁵⁹は輕健³⁶⁰にして、神觀³⁶¹開朗³⁶²なり。如し開食せんと欲すれば、二七³⁶³日以後を須ち、藥の丹田³⁶⁴に在るを候ちて、開食す可し。二七日に及ばずして食す

³⁵⁰ 不托：湯餅の別名。すいとん。

³⁵¹ 時辰：時間の單位。一昼夜を十二等分したものを一時辰とする。現在の二時間。

³⁵² 桐子：梧桐樹の果実。

³⁵³ 白湯：さゆ。

³⁵⁴ 後藥：二回目に服用する丹藥。

³⁵⁵ 萬緣：一切の因縁。

³⁵⁶ 時時：常に。

³⁵⁷ 茶湯：茶。

³⁵⁸ 肌肉：肉體の総稱。

³⁵⁹ 筋骨：韌帯と骨格。また、身體の総稱。

³⁶⁰ 輕健：敏捷で強健。

³⁶¹ 神觀：精神の有様。

³⁶² 開朗：明朗、樂觀、陰鬱でない。

³⁶³ 二七：十四。

³⁶⁴ 丹田：人体の部位の名。道教では人体に三つの丹田があるとされている。両眉の

れば、則ち薬は臟腑に随ひて下る矣。開食の後、如し更に住食せんと欲すれば、必ずしも服薬せず、止だ乳香湯を以て之を与（ととの）ふ。凶年³⁶⁵ 飢歲³⁶⁶なれば、父子夫婦相啖³⁶⁷ふに至らば、搗きて泥丸³⁶⁸と爲し、彈子³⁶⁹大に作り、黄丹を衣と爲し、紙帶子³⁷⁰もて此の薬一丸を盛り、縫合して臍中に著け、上は裹肚³⁷¹を用ひて繫定す。

箭鏃³⁷²に遇ひて未だ出でざる毎に、先づ上の如く繫定し、頃（しばらく）く象牙末を用ひて瘡口³⁷³に擦る。若し箭に中（あた）ること已に久しければ、須らく鋒刃³⁷⁴或いは針を用ひ、少少³⁷⁵取破し、象牙末を擦れば、則ち箭鏃は自ら出づ。如し魚骨喉に鯁（ささ）らば、以て針、錢、麥芒³⁷⁶に至るも、久近に限らず、皆な驗（しるし）あり。

延寿丹

神仙辟穀延寿丹は、一丸服すると、終身飢えることはない。光明硃砂一兩、飛過（水に浸して、浮いた屑を取り去る）して使用する。定粉一兩、焼いて黄色となったもの。白茯苓で、雪のように白い者一兩、或いは半兩を加える。黄丹で、やや赤い者一兩、飛過して使用する。乳香七錢半、水銀三錢、大金箔三十片、白沙蜜一兩、淨蠟二兩を計り、右のもののそれぞれ純粹で良質の者を選ぶ。先ず定粉を乳鉢に入れ細かく砕き、次に水銀を加え再び細かく砕き、ひたすら水銀の粒子がなくなるのを待つて目処とする。次に黄丹、硃砂、金箔を加え、再び細かく砕き、次に茯苓、乳香等の粉末を加え同じく細かく砕く。薬を☆の碗に入れ、熱湯の上に置いて、湯

間にある上丹田、心臓の下にある中丹田、臍の下にある下丹田である。一般的には下丹田を指す。

- 365 凶年：凶作の年。
- 366 飢歲：凶作の年。
- 367 泥丸：小さな泥の球。
- 368 彈子：彈丸。
- 369 帶子：縛るのに用いる紐状のもの。

を冷させない。別に蜜蠟を熱して溶かし、薬に加え、木の匙で攪拌し整える。手で何度も捏ねて丸める。一兩ごとに十二丸を作り、ひび割れがないようにする。朱砂、或いは水銀でコーティングする。コーティングしなくとも良い。もし水銀でコーティングしようとするならば、水銀二、三粒を手に取り、唾で擦って青色にし、薬の三から五丸を取って捻り合わせる。

薬の調合の時は雞、犬、婦人をタブーとする。薬が出来上がれば、☆の容器内に入れて貯蔵する。もし絶食しようと思ふなら、先ず油三兩、蠟一兩、小麦粉一斤を使用し、蜜一兩を入れ、焼餅（シャオピン）、或いは煎餅（ジエンピン）に混ぜ合わせる。もしそれがない時は、湯餅（タンピン）あるいは餅米（もちこめ）粥にして食べても良い。満腹になつてから、服薬する場合、乳香スープに一丸を加える。さらに二時間して、再び小麦粉を加えて熱し、蜜蠟を桐の実大の丸薬にし、温い白湯、或いは乳香スープに百丸を加える。これを名づけて「後薬」と言う。まず満腹になつてから、後薬を服するのである。それゆえ、二三日は眠たくない。眠たくとも問題はない。服薬の後には、きつと全ての因縁から自由になるであろう。そもそも、心が動けば気が散じ、言葉が多ければ気が傷む。故に辟穀（穀物断ち）する者は心を安らかにし、気を養うことを本務とする。事が起こればそれに対応し、事が終われば心に留めないようにせよ。常々、太陽に向かつて咽氣（道教の修養法、気を吸い込む）すれば、助けとなる。茶や白湯は自由に飲んで良いが、固形物を食べてはいけない。怒りを避け、疲れすぎを避けること。十日の後には、肉体は痩せるが、筋肉、骨格は敏捷で健

- 370 裹肚：北方の農民が日常的に用いる腹及び腰を包む布。
- 371 箭鏃：矢じり。
- 372 瘡口：潰瘍のあるところ。傷口。
- 373 鋒刃：刀剣の先端と刃先。借りて兵器を指す。
- 374 少少：やや。
- 375 麥芒：麦の穂ののぎ、とげ。

全となり、精神は爽快で開放的になる。もし食事を開始しようとするならば、十四日以後、薬が丹田にある状態になってから、食べ始めるべきである。十四日以前に食事を取ると、薬は内臓に沿って排出されてしまう。食事を始めた後、もし更に絶食しようとするならば、必ずしも服薬する必要はなく、ただ乳香湯を服用して体調を整える。凶作、飢饉の年には、親子夫婦で共食いという状態になったら、この延寿丹をつき捏ねて、弾丸状の泥丸にし、黄丹でコーティングし、紙紐で延寿丹一丸を包み、臍に結びつけ、腹帯で固定する（と飢えることはない）。

矢傷を負ってヤジリが抜けない場合、先ず上記のように縛りつけ、しばらく象牙の粉末を傷口にすりこむ。もし時間がかかりたつた場合、刃物或いは針を用いて、少し傷を切り開き、象牙の粉末を擦り込めば、ヤジリは自然と抜け出てくる。もし魚の骨が喉にささったり、さらには針、銭、麦芒（麦の穂先）が喉につかえたりしたならば、対処の早い遅いにかかわらず、（この方法は）全てに対して効果がある。

2. 38 熏死を救ふ

辛未³³⁷の冬、徳興³³⁸西南の磨石窯³³⁹、居民³⁴⁰兵を其の中に避く。兵人³⁴¹來り攻むるに、窯中の五百人、悉く烟火³⁴²の熏死するところと為る。内の一李帥なる者、迷悶³⁴³中に一凍蘆葍³⁴⁴を摸索し得て、之を嚼（か）むに、汁才（わずか）に咽（の）みて甦（よみがへ）る。因りて其の兄に與へ、兄も

亦た活く。五百人なる者此れに因りて皆な命を得たり。蘆葍は、細物³⁴⁵なるも、活人³⁴⁶の功は乃ち此くの如し。「中流に船を失へば、一壺も千金なり」³⁴⁷、真に虚語³⁴⁸ならず。河中³⁴⁹の人趙才卿³⁵⁰又た言ふ、「炭烟人を熏（くす）べば、往往にして死を致す。臥に臨みて蘆葍一片を削りて火中に著せば、即ち烟氣³⁵¹人を毒する能はず。如（も）し蘆葍無き時は、預め暴乾して未と為して急用に備ふるも、亦た可なり」と。

煙死の救助

辛未（二二二）の冬、徳興西南の磨石窯では、住民が兵火を避けて窯洞（ヤオトン、洞窟住居）に避難した。兵士が来て攻撃すると、窯洞の中の五百人は、全て煙のために死ぬところであった。中にいた李帥というものは、意識混濁中に、凍ったダイコンを手探りで掴んで、噛んだところ、汁が少し喉を通って生き延びた。それで兄にも与え、兄も生き延びた。五百人はこれによって皆な命が救われた。ダイコンは、つまらないものであるが、命を救った功績は、このように素晴らしい。「中流に船を失えば、一壺も千金なり（場合によって、つまらぬものでも価値がある。）」というのは、本当のことである。河中の人である趙才卿はまたこう言っている、「人が煙を吸い込むと、しばしば死亡する。倒れたならば、ダイコン一片を削って火中に投ずれば、煙は人を殺すことがなくなる。もしダイコンがない時は、あらかじめダイコンを乾燥させて粉末にし、急用に備えても良い」

³³⁷ 辛未：金の衛紹王完顔永済の大安三年（一一二一）。

³³⁸ 徳興：県の名、今の河北琢鹿県。

³³⁹ 窯：窯洞（ヤオトン）、人の住居にしている土室。

³⁴⁰ 居民：住民。

³⁴¹ 兵人：兵士。

³⁴² 烟火：火と煙。

³⁴³ 迷悶：混乱、意識不明。

³⁴⁴ 蘆葍：ダイコン。

³⁴⁵ 細物：小さなもの。

³⁴⁶ 活人：人を救う。

³⁴⁷ 中流失船、一壺千金：壺はヒョウタン、腰に繫いで川を渡ることができる。川の中ほどで船を失ったら、ヒョウタンでも千金の価値がある。軽微なものでも、有用な時には非常に貴重であることに例える。『鷓冠子』学問「中河失船、一壺千金」。

³⁴⁸ 虚語：嘘、虚言。

³⁴⁹ 河中：府の名、今の山西永濟西。

³⁵⁰ 趙才卿：趙素、字は才卿、号は盧白先生、河中の人、全真教の信者。

³⁵¹ 烟氣：燃烧の時に生ずる煙火の気。

と。

2. 39 神人³⁹²方

阿魏³⁹³散は、骨蒸³⁹⁴、傳尸³⁹⁵勞³⁹⁶、寒熱³⁹⁷、困羸³⁹⁸、喘嗽³⁹⁹を治する方なり。阿魏三錢・青蒿⁴⁰⁰一握を研りて、細切す・東北の桃枝一握、細剉す・甘草⁴⁰¹の病人の中指許り大の如き、男は左、女は右・童子の小便二升半。先づ小便を以て隔夜薬に浸し、明旦煎じて一大升⁴⁰²を取り、空心⁴⁰³に温服⁴⁰⁴するに、分けて三服と為して以て進む。次服は、檳榔⁴⁰⁵末三錢を調ふ。人の行くこと十里にして更に一服するが如し。丈夫病めば、婦人薬を煎じ・婦人病めば、丈夫薬を煎ず。合する時は、孝服⁴⁰⁶、孕婦⁴⁰⁷、病人及び腥穢⁴⁰⁸の物、雞犬の見るを忌む。服薬後は、油膩⁴⁰⁹、濕麵⁴¹⁰、冷硬物を忌む。服する

³⁹² 神人：神仙。道教において修行して道を体得し不老不死となった人。

³⁹³ 阿魏：臭気のある植物。根や茎の樹液は乾燥後、漢方で、消化を助け、殺虫解毒作用のある薬物となる。

³⁹⁴ 骨蒸：漢方医学の病症名。

³⁹⁵ 傳尸：漢方で肺結核症を指す。

³⁹⁶ 傳尸勞：漢方の病名。また、伝尸、労働、尸注、殍殍、復連、骨蒸という。現代医学の結核病を含む。

³⁹⁷ 寒熱：悪寒発熱。

³⁹⁸ 羸困：疲労困憊、虚弱。

³⁹⁹ 喘嗽：喘息、せき。

⁴⁰⁰ 青蒿：キク科の二年生草本植物。茎、葉は薬に入れる。

⁴⁰¹ 甘草：多年生草本植物。根は甘く、薬に入れる。

⁴⁰² 小升：隋・唐の容量単位。隋・唐の度量衡制度には大小二制あり、三小升を一大升とする。

⁴⁰³ 空心：空腹。

⁴⁰⁴ 温服：常用の服薬方法。薬湯を暖かい適温で服用すること。

⁴⁰⁵ 檳榔：檳榔樹の果実。薬用となる。消化を助け、虫下しの効能がある。

⁴⁰⁶ 孝服：服喪期間に着用する白布或いは麻布の喪服。

⁴⁰⁷ 孕婦：妊婦。

⁴⁰⁸ 腥穢：生臭い。ひどい臭気。

こと一二劑に至り、即ち蟲を吐出する或いは泄瀉すれば、更に餘薬を服するを須めず。若し未だ吐利せざれば、即ち當に盡く服すべし。病上に在れば即ち吐し、下に在れば即ち利⁴¹¹す。皆な蟲を出すこと馬尾、人髪⁴¹²の類の如ければ、即ち當に差⁴¹³(い)ゆべし。天下勞⁴¹⁴を治するに、直だ須らく累月⁴¹⁵或いは歳を経るべきに、唯だ此の方のみ神授⁴¹⁶に得て、隨手⁴¹⁷に取效⁴¹⁸す。陵川⁴¹⁹の進士劉俞、字彬叔は、都運司幕官に任ぜらるるの日、閻郎陟に得、云ふ是れ古の崔家の方なりと。閻は先に此の疾を患ひ、死に垂んとし、方を得て愈ゆ。劉は以て寧州の一官妓⁴²⁰を治すに、寸白蠱三四升、狀は蔥⁴²¹根の如きを利用し、隨即⁴²²にして平復⁴²³す。服薬後、諸疾を逐去するも、五藏⁴²⁴を虚羸⁴²⁵にして、魂魄不安なれば、即ち白茯苓湯を以て之を補ふ。

⁴⁰⁹ 油膩：油脂。

⁴¹⁰ 濕麵：湯餅の別名。サイトン。宋・謝維新『古今合璧事類備要』外集卷四十

六・餅餌門「入湯烹之、名湯餅、亦曰濕麵、曰不托、今日饅飀」。

⁴¹¹ 利：下痢。

⁴¹² 差：瘥、病氣平癒。

⁴¹³ 勞：病名。慢性疾患。

⁴¹⁴ 累月：数ヶ月。

⁴¹⁵ 神授：神明の授与。

⁴¹⁶ 隨手：直ちに。

⁴¹⁷ 取效：効果がある。

⁴¹⁸ 陵川：県の名、今の山西省東南部。

⁴¹⁹ 官妓：官員に奉仕する妓女。唐宋代では、役所での宴會に、官妓が奉仕をした。

⁴²⁰ 蔥：多年生草本植物。ネギ。

⁴²¹ 利：下痢。

⁴²² 隨即：直ちに。

⁴²³ 平復：平癒。

⁴²⁴ 五藏：五臟。心、肝、脾、肺、腎。

⁴²⁵ 虚羸：虚弱。

⁴²⁶ 魂魄：人体を離脱し、独立して存在可能な精神。

白茯苓一錢・茯神⁴³⁷一錢・人參⁴³⁸二錢・遠志⁴³⁹三錢、去心⁴⁴⁰龍骨⁴⁴¹二錢・防風⁴⁴²二錢・甘草⁴⁴³二錢・麥門冬⁴⁴⁴去心四錢、犀角⁴⁴⁵五錢、錯⁴⁴⁶して末と為す。生乾地黄⁴⁴⁷四錢・肥大せる棗七枚・水二大升、煎じて八分と作す。三服に分け、温下⁴⁴⁸す。人の行くこと五里にして更に一服するが如し。仍ほ風寒⁴⁴⁹を避く。若し未だ安からざるを覺ゆれば、隔日更に一劑を作す。已上兩藥は、須らく之を連服すべし。好問案するに、此の方本と『普濟⁴⁵⁰加減⁴⁵¹方』に出ず、其の語簡略にして、又た從來⁴⁵²する所を著せず⁴⁵³、而して世人甚しくは敬信⁴⁵⁴せず、故に備(つづき)に之を論ず。

神人方

阿魏散は、骨蒸(骨の内部から熱が発している感覺がある。結核に相当する)、伝戸勞(肺結核)、寒熱(發熱)、困羸(疲勞困憊)、喘嗽(喘息、せき)を治療する処方である。阿魏三錢、青蒿一握を刈り取つて、細く切つたもの。東北に向いた桃の枝一握りを細く刻んだもの。甘草で、病人の中指大の大きさのもの、男は左、女は右。子供の小便を二升半。先ず薬を小便で二晩浸し、翌朝煎じて三升を取り、空腹時に温めて服用するが、三服に分けて飲ませる。次の服用には、檳榔末三錢を加える。それは、人が十里(五キロ程度)歩いたら一休みするようなものである。夫が病氣の時は、妻が薬を煎じる。婦人が病氣の時は、夫が薬を煎ずる。薬の調合の時

は、喪服、妊婦、病人及び汚物や、雞・犬に見られることを避ける。服薬後は、油、湯餅(タンピン)、冷たく硬い物を避ける。一二劑を服用して、すぐに虫を嘔吐したり、あるいは下痢になつたりした場合、残りの薬の服用は必要ない。もしも嘔吐や下痢がなければ、直ちにすべての薬剤を服用すべきである。病氣が上半身に存在すれば嘔吐し、下半身に存在すれば下痢となる。どちらも馬の尾、人の髪の毛のような虫が出れば、病氣はすぐに平癒するだろう。世間では一般に慢性疾患を治療するには、数ヶ月あるいは一年かかるが、この神人方だけは、神仏の助けを得て、すぐに効果が現れる。

陵川の進士である劉俞、字彬叔は、都運司幕官に任ぜられた日に、閻郎陟から神人方の処方入手したが、閻郎陟によれば、この処方古の崔家の処方、以前、閻郎陟がこの病氣になつて死にかけたが、神人方によつて平癒したという。劉俞はこの神人方を用いて寧州の一人の官妓を治療したところ、一寸ほどの白虫で、ネギの根つこのようなものを三四升も吐き出し、すぐに平癒した。服薬後、様々な病氣は治つたが、五臟(心、肝、脾、肺、腎)が虚弱で、精神が不安定になつたので、白茯苓湯を処方してそれを補つた。白茯苓一錢、茯神一錢、人參三錢、遠志三錢、去心龍骨二錢、防風二錢、甘草三錢、麥門冬去心四錢、犀角五錢をすり潰して粉薬とし、生ま及び乾燥した地黄四錢、肥大した棗七枚、水六升を加えて、煎じ

437 茯神：内部に木質を含む茯苓。
438 人參：多年生草本植物。薬用ニンジン。
439 遠志：多年生草本植物。
440 去心：「心」とは一般的に根を薬用とする植物の木質部或いは種子の胚芽を指す。薬用植物の薬用とならない木質部分を取り除く。
441 龍骨：龍の骨。実際には動物の化石。
442 防風：薬草名。多年生草本植物。
443 甘草：多年生草本植物。
444 麥門冬：多年生草本植物。
445 犀角：サイの角。

446 錯：碎く。
447 地黄：薬用植物。
448 温下：温めて服用する。
449 風寒：冷風寒気。
450 普濟：あまねく救う。
451 加減：漢方の処方、病人の症状を勘案して、薬物を加減すること。
452 從來：由来。
453 不著：記載しない。
454 敬信：尊敬し信任する。

て八割になるまで煮詰め。三回に分けて、温めて服用させる。それは、人が五里（二・五キロ程度）歩いたら一休みするようなものである。引き続き冷風寒気を避ける。もしまだ不安定であると感ずるならば、一日おきに更に一剤を服用する。以上、二つの薬を、連続して服用するべきである。元好問が思うに、この神人方という処方、もともと『普濟加減方』に掲載された処方であるが、その説明は簡略で、さらに由来を記していないため、世間からあまり尊敬、信頼されていない。その為、ここに詳細に説明を加えたのである。

2. 40 背疽（方二）

背腦に發せる疽、一切の惡瘡（疔）を治す。初覺の時、獨科蒼耳（一）を採り、葉を連ね（子）を帶して細割し、鐵器を犯（さ）さず。砂鍋（三）を用ひて水二大碗を熬し、熬して一半に及ぶ。瘡上に在らば、飯後に徐徐に服を之し、吐出し、吐の定まるを候ちて再服し、盡くを以て度と為す。瘡下に在らば、空心に服す。瘡目破し出膿すれば、更に潰引（四）せず。瘡上には別に膏藥（五）を

55 背疽：背部の腫れ物。西洋医学の背部急性化膿性蜂窩織炎。

56 惡瘡：漢方で定名のない腫れ物。

57 蒼耳：一年生草本植物。

58 帶子：腰帶。

59 犯：触れる。

60 砂鍋：粘土を原料として焼成した鍋。

61 潰引：つぶれただれて蔓延する。

62 膏藥：外用薬の一種。

63 京兆：路の名、金の皇統二年（一一四二）に京兆府路が置かれた。治所は今の陝西省西安市。

64 張伯玉：名は穀、許州臨潁（今の河南省臨潁県）の人。議論が得意で、氣質は

豪快。進士に挙げられ、科擧の試験場で名声があった。

65 榜示：告示。

66 昆仲：兄弟。

67 善報：善行を行って得られた良い報い。

以て之に傳（つ）く。此の方は京兆（六）の張伯玉（七）家榜示（八）して人に傳ふ。後に昆仲（九）皆な登第（一〇）す。人善報（一一）と謂ふ。

一切の惡瘡を治するには瓜萆方を服す。懸萆（一二）一枚、皮を去りて穢（一三）及び子を用ひる。生薑（一四）四兩、甘草（一五）二兩、横文ある者佳し。細切して生用す。無灰酒（一六）一碗、煎じて半ばに及び、濃くして之を服す。煎する時は銅鐵を犯さず。病が上に在れば、食後、下に在れば、空心。洪氏方、陳日華方に見ゆ。中州初め子を約す。張戸部林卿（一七）は、其の方に大黃（一八）、或いは木香（一九）、或いは乳香（二〇）、沒藥（二一）を加ふる者有り。大率瓜萆、生薑、甘草を以て主と為す。瘡を病めば先づ疏利（二二）し、次に瓜萆薬を用ひ、日び乳香、菴豆粉を以て温下すること三五錢。毒氣の腹に入るを防ぐの外、膏を以て之を塗傳すれば、病者も亦た慮ること無し矣。好問年二十一、先君の隴城大安（二四）に官たるに侍す。庚午（二五）先人（二六）疽を鬚に發するを承る。好問愚幼（二七）にして、平居

28 萆：萆蒿。

29 穢：黍稷稻麦等の植物の茎。

30 生薑：生姜の新鮮な茎と根。

31 無灰酒：酒の名。

32 張戸部林卿：張翰（一一二七、字は林卿、秀容（今の山西忻州市）の人、大定二十八年（一一八八）の進士、宣宗の時に戸部尚書となる。

33 大黃：薬草の名。多年生草本。

34 木香：多年生草本植物。

35 乳香：本名は薰陸、橄欖科常緑喬木の凝固した樹脂。

36 沒藥：中薬の名。

37 疏利：排泄。

38 大安：金の衛紹王完顔永濟の年号（一一〇九―一一一〇）。

39 庚午：一一二〇年。中華書局本は「庚子」に作る。

40 先人：亡父。

41 愚幼：愚鈍で幼稚。

其の擧子の計を作し、藥醫に於いて懽然として知る所無し。庸醫前に滿ち、其の施設に任ずに、先君竟に是を用て捐館す。其の後郷に還り、此の方を家塾に得、以て他人を治すに、遂に百驗の效有り。疇昔を感念するに、慚恨地に入る。人の子為りて醫を知らざれば、其の禍を受くること乃ち此くの如し。故に之を並記して戒と爲す。

背疽方二つ

背中や頭に発症した疽(腫れ物)やあらゆる悪瘡(悪性の腫れ物)を治療する。最初に気づいた時に、独科蒼耳を一根採取し、葉と実を合わせて細かく刻み、鉄製の器には触れさせない。砂鍋(粘土を焼き固めた鍋)を用いて二天碗分の水で全体が半分になるまで煎じる。瘡(腫れ物)が上半身に在る場合、食後にゆつくりと服用すると嘔吐する。嘔吐が落ち着いてから再び服用し、すべてを服用して終わりとする。瘡が下半身に在る場合、空腹時に服用する。瘡が自然と潰れて膿が出たら、それ以上は広がらない。瘡の上には別に膏薬を貼り付ける。この処方、京兆の張伯玉家が揭示して人々に伝えたものである。後に張伯玉の兄弟はみな科挙に合格した。人々はこれを善行の果報であると言った。

あらゆる悪瘡(悪性の腫れ物)を治療するには、瓜萋方を服用する。懸萋を一枚とり、皮を取り去つて莖と実を用いる。生薑は四両、甘草は二両、横筋のあるものが良く、細かく刻んで生で用いる。無灰酒は一碗。全てを合わせて分量が半分になるまで煎じ、濃いものを服用する。煎ずる時は銅

- 472 平居：平日、平素。
- 473 懽然：ほんやりとした様。
- 474 庸醫：凡庸な医者。
- 475 施設：措置する。
- 476 先君：物故した父親。
- 477 捐館舎：死亡の婉曲表現。
- 478 還郷：故郷に帰る。
- 479 家塾：私塾。

や鉄の器に触れさせない。悪瘡が上半身に在れば、食後に服用する。悪瘡が下半身に在れば、空腹時に服用する。『洪氏方』、『陳日華方』に掲載されている。中原地域では最初、実を使用しなかった。戸部尚書の張林卿は、この処方に大黃、或いは木香、或いは乳香、沒薬を加えている。おおむね瓜萋、生薑、甘草を主とする。瘡ができるとまず排泄させ、次に瓜萋の葉を使用し、毎日、乳香、菘豆粉を三五錢ほど加え、温めて服用する。毒気が腹に入るのを防ぐ他、塗り薬を塗ること、病人も心配がなくなる。わたくし元好間は二十一歳で、父が隴城大安で官職についたのにお供していた。大安二年(一二二〇)に、父は疽を鬢に発症したことを承った。わたくしは愚かで幼く、平日は科挙の受験勉強をしており、薬や医学について暗く、何も知らなかった。大安では凡庸な医者がいて、彼に治療を任せたら、それが原因で父は亡くなった。その後、郷里に帰り、この処方を家塾(一族の私塾)で入手し、他の人の治療に当たったが、確実な効果があった。昔のことを思い起こすと、慚愧に耐えない。人の子として医学に暗いと、このような災厄を受けることになる。そのため、ここに併記して戒めとする。

2. 41 内藏庫の龍

遼祖神冊五年三月、黑龍拽刺山陽水に見る(あらは)る。遼祖馳せ往く。三日にして乃ち至るを得るも、而るに龍尚ほ去らず。遼祖之を射て斃す。龍は一角にして、尾長く足短く、身長五尺にして、舌の長さ二寸有半。命

- 480 疇昔：過去、昔。
- 481 感念：おもむ。
- 482 慚恨：恥ずかしく残念に思ふ。
- 483 入地：地下に潜る。恥ずかしさの形容。
- 484 人子：子供。
- 485 受禍：災禍に遭遇する。
- 486 神冊：遼の太祖耶律阿保機の年号、神冊五年は九二〇年。
- 487 見：出現する。

じて之を内庫に藏せしむ。貞祐南渡⁸⁸に尚ほ在り、人見るに、舌は蒲楷形を作す也と。

内藏庫の竜

遼の太祖耶律阿保機の神冊五年(九二〇)三月に、黒い竜が拽刺山陽水に出現した。遼の太祖は馬を駆つて出かけ、三日でやつと到着できたが、竜はまだそこにいた。遼の太祖は竜を射殺した。竜は一角で、尾長く足短く、身長は五尺、舌の長さは二寸半であった。命じて竜を内庫に所藏させた。金の宣宗貞祐二年(一二二四)、モンゴルの侵攻で中都を放棄し南の汴京に都を移した時にもまだ竜は所藏されていた。見た人によると、竜の舌は蒲の茎のような形をしていたという。

2. 42 都城の夜怪

從舅⁸⁹の張伯達⁹⁰、知徴、飛卿⁹¹は、崇慶二年正月同じく省試に赴く。挈する所の僕夫⁹²戯れに王輿を以て之を目する者、迎鑾坊に宿す。夜起ちて便旋⁹³するに、足纜(わすか)に門を出づるに、對街⁹⁴の一鬼を見るに、青面赤髮にして、目光は炬の如く、腕に一劍を懸けて坐す。旁に一卒侍立し、獐惡⁹⁵にして尤も怖るべし。輿は大叫して仆れ、三四時許りにして乃

⁸⁸ 貞祐南渡：金の宣宗貞祐二年(一二二四)、モンゴル軍の進攻を避けて、中都(北京の西南隅)から黄河を南に渡り、汴京(今の開封)に遷都した。

⁸⁹ 從舅：母親のおじ兄弟。

⁹⁰ 張伯達：評注は、『元史』張礎傳「張礎祖伯達、曾從忽都忽那顔略地燕薊、金守將其蒲察斤以城降、忽都忽承制、以伯達為通州節度判官、遂知通州」を引用し、この人物が元好問の從舅であるかどうかは不明とする。

⁹¹ 中華書局本は、この部分に脱文等のあることを疑っている。

⁹² 崇慶：金の衛紹王完顔永濟の年号。崇慶二年は一二二三年。

⁹³ 僕夫：車馬の御者。

⁹⁴ 便旋：小便。

⁹⁵ 對街：対面の道。

⁹⁶ 侍立：恭順してそばに立ち奉仕する。

ち甦⁹⁷る。之に問ふに、見る所此くの如しと言ふ。

都城の夜怪

外祖父の兄弟である張伯達と知徴、飛卿は、崇慶二年(一二二三)正月、ともに中都での省試に向いた。引き連れて行った御者を戯れに王輿とよんでいたが、彼は迎鑾坊に宿泊した。御者は夜起きて小便に行くと、門を出たばかりのところで、向かいの街路に幽霊のいるのを目にした。そいつは、青面赤髮で、眼光は松明のようで、腕に一振りの劍を懸け坐っていた。そばに兵卒が控えていたが、凶悪で恐ろしかった。王輿は大声を上げて叫び倒れたが、五、六時間経って生き返った。質問すると、上記のようなものを見たと言った。

2. 43 都城の大火

大安⁹⁸の末、都城⁹⁹頻歲¹⁰⁰大火あり。凡そ焚か被るの家は、或いは牆壁の間に、先に朱書の字有りて之に記し、尋いで即ち火起る。互相訪問¹⁰¹するに、然らざる者無し。凡そ延焼すること三數萬家。市中の佛閣、唐日自り之れ有るに、遼人又た之を護國仁王¹⁰²佛壇と謂ふ。千手眼大悲閣の字は虞世南¹⁰³の書く所なり。閣の焚か被るに及び、衛紹王¹⁰⁴旨有り、世南の書ける

⁹⁷ 甦惡：凶悪。

⁹⁸ 甦：蘇生する。

⁹⁹ 大安：金の衛紹王完顔永濟の年号(一二〇九—一一二)。

¹⁰⁰ 都城：金朝の首都である中都(今の北京西南隅)。

¹⁰¹ 頻歲：連年。

¹⁰² 訪問：問い合わせる。

¹⁰³ 仁王：仏に対する尊称。

¹⁰⁴ 虞世南：虞世南(五五八—六三八)、唐代の書道家。字は伯施、越州余姚(今は浙江に所属の人。官は秘書監にいたり、永興県公に封ぜられた。文章に優れ、『北堂書鈔』を編纂した。書法に精通し、歐陽詢、褚遂良、薛稷と合わせ「初唐四家」と併称される。碑刻「孔子廟堂碑」等が現存する。

¹⁰⁵ 完顔永濟(一一二二—一一二二)：本名は允濟、字は興勝、虎水(今の黒龍江省哈爾

榜を救は令むに、顧盼⁵²⁵中も已に及ぶ無し矣。識者⁵²⁶謂へり、護國壇の焚か
れるは、不祥⁵²⁷なること之れ甚しと。一年ならずして、遂に虎賊⁵²⁸弒逆⁵²⁹
の禍⁵³⁰有り。

都城の大火

大安年間（一二〇八―一一）の末、都城では連年大火があつた。火事にあ
つた家はみな、場合によつて、外壁にまず朱書きの字が書かれており、そ
の後すぐに火事になつた。互いに尋ね合つと、すべて同様であつた。延焼
した家屋は全部で三万から数万軒であつた。街中の仏寺は、唐代からの寺
院であるが、遼の人々は護国仁王仏壇とも呼んでいた。寺院の千手眼大悲
閣の字は虞世南の書いたものである。千手眼大悲閣が火事になると、衛紹
王の勅命が有り、虞世南の書いた扁額を救助させた。見回しているうちに
火が周り間に合わなかつた。有識者は次のように言つた、護国仁王仏壇が
火事にあつたのは極めて不吉なことであると。一年も経たずに、ついに衛
紹王が臣下の胡沙虎に毒殺されるという事件が起こつた。

2. 44 駢胎

興定、元光⁵³¹の間、陽翟⁵³²の小學王奉先は、其の妻先に四子を産み、再び

濱市阿城区)の人。金朝の第七代皇帝。

⁵²⁵ 顧盼：左右、周囲をキョロキョロみる。

⁵²⁶ 識者：見識ある人。

⁵²⁷ 不祥：不吉。

⁵²⁸ 胡沙虎：胡沙虎（？―一二二二）、後に紇石烈執中を名とする。女真人。金朝の
権臣、一二二三年に反乱を起し、金帝完顔永濟を殺し、完顔珣を皇帝に擁立し
て、太師、尚書令、都元帥、監修国史となり、沢王に封ぜられた。後に部將の術虎
高琪に殺された。

⁵²⁹ 弒逆：君主を殺すこと。

⁵³⁰ 虎賊弒逆之禍：一二二三年八月、金の右副元帥胡沙虎が謀反し、金帝完顔永濟
を殺害した事件。

三子を生む。辛未⁵³³十一月、秀容の福田寺の農民范班の妻は、連ねて三歳
に三男三女を擧⁵³⁴ぐるに、皆死せり矣。此の歳復た一男一女あり。其の母
旁從（よ）り歎じ訝みて云ふ、「汝必ず活きず、早に過去⁵³⁵するを得るも亦
た好し」と。兒忽ち能く言ひ、連ねて曰く、「去かず。去かず」と。母驚き、
其の父に語る。語未だ竟はらざるに、兒は依前にして「去らず」と言ふ。
未だ幾（いくばく）ならず兒女は皆な死す。南齊の褚侍中澄⁵³⁶の『醫說』
論受形に云ふ有り、「陰陽俱に至れば、非男非女の身なり。積血⁵³⁷散分すれ
ば、駢胎⁵³⁸品胎⁵³⁹の兆なり。如し化生⁵⁴⁰を言ふならば、固より是の理有りて、
訝しと為すに足らず」と。予謂へり、褚論は固より廢すべからざるも、然
るに駢胎品胎の二家なる者は、世に亦た多見せざる耳と。

双子

興定、元光年間（一二一七―一二二二）、陽翟出身の小学教授の王奉先は、妻
がまず四つ子を産み、その後三つ子を産んだ。辛未（一二二一）十一月に
は、秀容の福田寺の農民范班の妻が、三年連続して三男三女の双子を産ん
だが、皆死んだ。本年また一男一女の双子を産んだ。その母はそばから嘆
き悲しみ訝しがつて生まれた子供にこう言つた、「お前はきつと生きてはい
けない。早死にできるのも良いだろう」と。子供は急に話ができるように

⁵³¹ 興定、元光：金の宣宗完顔珣の年号。興定（一二二七―一二二八）、元光（一二二二―一二二九）。

⁵³² 陽翟：県の名、今の河南省禹県。

⁵³³ 辛未：一二二一年。

⁵³⁴ 擧：養育する、生育する。

⁵³⁵ 過去：死亡する。

⁵³⁶ 褚澄：南朝齊の武帝時代の人、字は彥道、医術を得意とした。『医說』が伝わ
っている。侍中、領右軍將軍となつた。

⁵³⁷ 積血：たまった血液。

⁵³⁸ 駢胎：双子。

⁵³⁹ 品胎：三つ子。

⁵⁴⁰ 化生：変化育成。

なり、「死なない。死なない」と連呼した。母は驚き、その父に語ったが、母の話の途中で、子供は前と同じように「死なない」と言った。まもなく男女の双子は共に死んだ。南朝齊の褚澄『医説』論受形（出産について）にはこう言っている、「陰陽の気が両方ともに到達すると、男でも女でもない子供が生まれる。たまった血液が分散すると、双子、三つ子の前兆となる。出産については、本来このような法則が存在し、疑問視するまでもない」。わたしが思うに、褚澄の理論は、本来無視できないものであるが、双子、三つ子を産む二つの家は、世間であまり見かけない。

2. 45 童哥

南渡の後、京師の一満師なる者、一神童に事ふ。自ら言ふ、「貴家に出で、姓は阿不罕氏なり。八歳にして平章進忠の都城を棄つるに遭ふ。人之を負ひ、門を奪ひて出づるに、人馬蹂踐して死す。夙世満師に錢を負ふこと算無く、今來之を償ふ」と。京師の貴家は迎へざる無く、宮禁に傳達するに至る。問ふ者は香を焚き、酒を酌（そそ）ぎ。満は其の旁に袖手し、童は自ら人と語り、明了にして辨す可し。其の聲を尋ぬるに空中に在り、酒を酌きて地に在れば、則ち颯然として下ること、就きて之を飲む者の如し。連亡。遺失を問ふに、争訟に涉らず、利害に關

⁵²² 南渡：金王朝の中都から汴京への遷都。

⁵²³ 京師：国都。

⁵²⁴ 神童：仙童。

⁵²⁵ 貴家：貴族や有力者の家。

⁵²⁶ 阿不罕：金代女真族の姓。

⁵²⁷ 平章進忠棄都城：評注は、薛應旂『通鑑』「時（中都）被圍久…盡忠（即「進忠」）將南奔…乃與愛妾及所親出城、不反顧…盡忠至汴、釋不問、仍為平章。」

⁵²⁸ 貞祐三年十月、始伏誅」を引用し、「進忠」は穆延盡忠、金の宣宗時代の左丞相兼

⁵²⁹ 左副元帥、申国公で、命を受けて中都を守っていたことを言う。

⁵³⁰ 奪門：全力で門を開け放つ。

⁵³¹ 蹂踐：ふむ。

せざれば、則ち之を言ふ。問ふに千里の外の事を以てすれば、則ち曰く、「我往きて之を問ふ」と。良や久しくして至り、必ず困乏を以て言と為す。經る所の家、他日滿在らざると雖も、亦た自ら來りて語話す。滿是れに由り致富す。汴京破れし後、復た北上し、貴近の家に出入せりと聞けり矣。

童哥

金王朝の南遷の後、首都汴京の満師なる者が、一人の仙童（子供の仙人）に仕えていた。仙童は自ら言つた、「私は高貴な家の出身で、姓は阿不罕氏である。金の宣宗の左丞相である穆延尽忠がモンゴル軍に包圍された中都を放棄して脱出し、中都が陥落するのに、八歳で遭遇した。人に背負われて、城門を争つて出た時に、人や馬に踏みつけられて死んだ。前世では満師に大きな借金があり、今それを償つてるところである」と。汴京の高貴な家は挙つて仙童を迎え入れ、その噂は宮中に達した。質問者は、香を焚き、酒を注ぐが、満師は何もせずただ傍観していた。仙童は自ら人に語り、その言葉は明瞭で明快であった。声が空中から聞こえ、地面に酒を注ぐが、さつと降臨してきて、その場で酒を飲んでいようであった。尋ね人、失せ物を聞くと、訴訟に關係せず、利害に関わらなければ、回答が

⁵³⁰ 夙世：前世。

⁵³¹ 無算：数えきれない。

⁵³² 宮禁：宮中。

⁵³³ 酌酒：酒を地面に注ぐ。祭奠を意味する。

⁵³⁴ 袖手：手を袖に入れ。のんびりとした様子を指示。

⁵³⁵ 颯：素早く通り過ぎる音を形容する。

⁵³⁶ 連亡：逃亡した人。

⁵³⁷ 困乏：貧困、窮乏。

⁵³⁸ 汴京：今の河南開封市。金の宣宗はここに遷都したが、一二三四年モンゴル軍に占拠された。

⁵³⁹ 貴近：位の高い近臣。

あつた。千里の彼方にいる人のことを質問すると、「言つて聞いてこよう」と言い、しばらくして戻り、必ず困窮しているという回答であつた。仙童を招いた家では、他日、満師がいなくても、自らやつてきて会話をした。満師はこれによつて裕福になつた。汴京が陥落したのち、再び北上し、高位高官の家に入入りしていると聞いた。

2. 46 子を生むに兩頭

正大辛卯⁵¹⁰十二月、陽翟⁵¹¹の士人王子思家の一婢、子を生むに一身にして兩頭なり。乳媪⁵¹²以て怪と為し、其の一を摘去するに、氣系は兩岐に分れて出づ。明年正月、西行せる諸軍に三峰の敗⁵¹³有り。

兩頭の子を生む

正大八年（一二三二）十二月、陽翟の士人王子思家の一人の下女が、子供を産んだが一つの体に頭が二つあつた。乳母はそれを怪異であると判断し、頭の一つを取り去つたところ、氣道が二つに分かれて出てきた。明年の正月、西へと進軍した金王朝の軍隊は鈞州三峰山でモンゴル軍の襲撃に遭い、壊滅した。

2. 47 生死の數

王右司仲澤⁵¹⁴は、歸德⁵¹⁵の一武弁⁵¹⁶、奥里光祿⁵¹⁷なる者を識るに、清州⁵¹⁸人にして、其の子、孫、曾孫、男女俱に九月を以て生まるること、凡そ十六人なり。李昂霄⁵¹⁹の同舎生の劉遠之は、燕の人にして、兄弟五人俱に七月を以て生まる。高唐⁵²⁰の閻内翰子秀⁵²¹の子、之の父は其の母に洎（およ）び、後に俱に六月二十九日を以て物故し、子秀も亦た然り。豈に偶然ならん哉。

生死の運命

権右司郎中の王仲沢は、歸德出身の一武官で光祿大夫の奥里なる者を知つていたが、彼は清州の人で、その子、孫、曾孫は、男女ともに九月生まれで、全部で十六人いた。李昂霄の同窓生の劉遠之は、燕の出身で、兄弟五人ともに七月生まれである。高唐出身の応奉翰林文学の閻子秀は、その子、父、母まで、その後ともに六月二十九日に物故し、子秀もそうであつた。単なる偶然であろうか。

2. 48 党承旨の生死の異

承旨⁵²²党⁵²³、初め孕に在りて、其の母 唐の道士吳筠⁵²⁴の來りて託宿⁵²⁵するを夢む。為人儀表⁵²⁶は修整⁵²⁷にして、之を望めば神仙の如し。西掖⁵²⁸に在

⁵¹⁰ 正大辛卯：正大、金の哀宗完顔守緒の年号。正大辛卯は一二三二年。

⁵¹¹ 陽翟：県の名。今の河南省禹県。

⁵¹² 乳媪：乳母。

⁵¹³ 三峰之敗：一二三二年正月、モンゴル軍は鈞州三峰山で金軍を待ち伏せし、金軍の主力は全滅し、主要な將軍はほとんどが犠牲になつた。

⁵¹⁴ 王仲澤：王渥、字は仲沢、太原の人。興定二年（一二二八）の進士で、官は尚書省令史に至つた。枢密院經歷官、権右司郎中であつた。

⁵¹⁵ 歸德：府の名。今の河南省商丘県南。

⁵¹⁶ 武弁：武官。

⁵¹⁷ 光祿大夫：官名。金元では金紫、銀青を光祿大夫の上に昇格させた。

⁵¹⁸ 清州：治所は今の河北青県。

⁵¹⁹ 高唐：今の山東高唐県。

⁵²⁰ 閻子秀：名は長言、濟南長清の人。好字で詞賦に巧みであつた。後に科擧でトツ合格し、翰林院に十年勤めた。

⁵²¹ 承旨党公：党懷英（一二三四—一二二二）、金の文学者。字は世傑、号は竹溪。大定年間に進士合格し、官は翰林学士承旨に至つた。詩文に巧みで、書法にも優れていた。

⁵²² 吳筠：唐の玄宗朝の道士、字は貞節、華陰の人。

⁵²³ 託宿：宿をとる。

⁵²⁴ 儀表：外面。要望、姿、風采を指す。

⁵²⁵ 修整：言行が端正で謹直、礼法に外れない。

⁵²⁶ 西掖：中書或いは中書省の別称。

ること三十年、承旨⁵⁵⁷を以て致仕⁵⁵⁸す。大安⁵⁵⁹三年九月十八家に終る。是の夕、大星⁵⁶⁰の居に殞つる有り。公は篆籀⁵⁶¹入神⁵⁶²にして、李陽冰⁵⁶³以後、一人のみ。嘗て、唐人の韓、蔡⁵⁶⁴は字學⁵⁶⁵に通ぜず、八分⁵⁶⁶は篆籀中自り來れり、と謂ふ。故に公の書 上は鍾、蔡⁵⁶⁷を軋(し)のぎ、其の下は論ぜざる也。小楷⁵⁶⁸は虞、褚⁵⁶⁹の如くして、亦た當に中朝⁵⁷⁰第一と為すべし。書法は魯公⁵⁷¹を以て正と為し、柳誠懸⁵⁷²以下は論ぜざる也。古人は一藝に名あるも、而るに公は獨り之を兼ね。之を全と謂はざること可ならん乎。其の當世の推重⁵⁷³する所と為ること此くの如し。東坡⁵⁷⁴は、韓退之を「生くる也自來有り、而して逝く也為す所有り」、と謂へり。公の生死の際を以て之を觀るに、亦た以て斯の語に愧⁵⁷⁵すること無かる可し矣。

党懷英の優れた人生

翰林學士承旨の党懷英公は、まだ母の腹中にある時、母が、唐の道士吳筠⁵⁷⁶が家にやつてきて寄宿するという夢を見た。党懷英公の人となり、風采は端正で礼法にかなない、神仙のようであった。宮廷の中書省でお仕えすること二十年、翰林學士承旨の官位に至って辞職した。大安三年(一一二二)九月十八日自宅で亡くなった。その夕、大きな星が家に落ちるといふこと

⁵⁵⁷ 承旨：官名。唐代翰林院には翰林學士承旨があり、位は諸學士の上であった。
⁵⁵⁸ 宋元ではその制度を踏襲した。
⁵⁵⁹ 致仕：官職を辞する。
⁵⁶⁰ 大安：金の衛紹王完顔永濟の年号(一一二〇—一一二二)。
⁵⁶¹ 大星：星座の中で大きく明るい星。
⁵⁶² 篆籀：篆書と籀文。
⁵⁶³ 入神：技芸が神業の域に到達していること。
⁵⁶⁴ 李陽冰：字は少温、李白の叔父、唐朝の著名な書法家、篆書に巧みであった。
⁵⁶⁵ 韓、蔡：唐代の書法家の韓攄木、蔡允恭。
⁵⁶⁶ 字學：書法の学問。
⁵⁶⁷ 八分：字体の名。隸書に似て波磔が多い。秦の時代に上谷の人の王次仲が作つたとされる。八分の命名については諸説がある。
⁵⁶⁸ 鍾、蔡：魏の書法家である鍾繇と後漢の書法家蔡邕。

があった。公は書法において、篆書、籀文は入神の域に達しており、唐代の書道家李陽冰以後、第一人者である。以前、「唐代の書道家韓攄木、蔡允恭は書法の学問に通じていない。八分は篆書、籀文の中から自然と生まれたいものである」とおっしゃっていた。故に公の書法は、上は魏の書道家鍾繇、後漢の書道家蔡邕を凌ぐもので、下は論ずるまでもない。小楷は、唐の書道家虞世南、褚遂良に匹敵し、これも我が金王朝第一とすべきである。書法は唐の書道家顔真卿を正統として継ぐもので、唐の書道家柳公権以下は論ずるまでもない。古人は一つの才能で名声を獲得したが、公は全てをかねて極めており、完璧だと言わないでおかれようか。現在、公はこのように尊重されている。宋の蘇軾は、唐の韓愈を、「生まれたのには理由があり、死んで成し遂げるものがあつた」と言った。公の人生を概観すると、この言葉に恥じないといえる。

2. 49 天賜夫人

廣寧⁵⁷⁷の間山公廟は、靈應甚はだ著(いちじる)し、又た其の象設⁵⁷⁸、獐惡⁵⁷⁹にして、林木⁵⁸⁰蔽映⁵⁸¹し、人白晝に其の中に入るに、皆な恐怖し毛豎⁵⁸²つ。

⁵⁷⁷ 小楷：楷書の小字。
⁵⁷⁸ 虞、褚：唐朝の書法家である虞世南、褚遂良。
⁵⁷⁹ 中朝：ここでは金朝。
⁵⁸⁰ 魯公：唐朝の書法家顔真卿を指す。彼は魯国公に封ぜられた。
⁵⁸¹ 柳誠懸：唐朝の書法家柳公権、字は誠懸。
⁵⁸² 推重：推許し尊重する。
⁵⁸³ 宋・蘇軾：潮州韓文公廟碑「匹夫而為百世師、一言而為天下法。是皆有以參天地之化、關盛衰之運。其生也有自來、其逝也有所為」。
⁵⁸⁴ 廣寧：金の県名、今の山東北鎮。
⁵⁸⁵ 象設：元もと仏像を指す。
⁵⁸⁶ 獐惡：凶惡。
⁵⁸⁷ 林木：樹林。
⁵⁸⁸ 映蔽：遮蔽。

旁近⁸⁸⁰言へり、「静夜 時に訊掠⁸⁸¹の聲を聞く」と。故に過ぐる者は或いは
 迂路⁸⁸²して之を避く。參知政事梁公肅⁸⁸³、此の郷の捧馬嶺に家す。舉子⁸⁸⁴と
 作る時、諸生⁸⁸⁵と夏課⁸⁸⁶を結び、談じて鬼神の事に及び、時人の膽勇⁸⁸⁷なる
 者を歴數⁸⁸⁸するに、梁公都(すべ)て之を許さず。因りて自ら言へり、「我
 は、昏暮⁸⁸⁹或いは陰晦⁸⁹⁰の際を以て、閭山廟に入り、廊廡⁸⁹¹を巡ること一周
 することを能くす」と。諸生之を從曳⁸⁹²して曰く、「往くことを能くすは、
 何を以て信を取らん⁸⁹³」と。梁公曰く、「我れ當に周行⁸⁹⁴する處に就きて物
 を以て之に畫(えが)く、是を用て驗と為さん」と。明日の晩に、偕に往
 くことを約す。諸生 廟門⁸⁹⁵の外に待つ。袖を奮つて徑⁸⁹⁶ちに去く。畫き
 て廟の東隅に至り、摸索⁸⁹⁷するに一人の壁に倚りて立つ有り、梁公其の鬼
 為ると意ひ、之を負ひて出づ。諸生迎へて何の見る所ぞと問ふ。梁公笑ひ
 て曰く、「我れ一鬼を負ひて至れり矣。火を取りて之を照らすべし」と。火
 の至るに及び、是れ一美婦なるを見る、衣裝は絶へて世俗⁸⁹⁸と同じからず。

- 880 旁近：附近。
 881 訊掠：拷問。
 882 迂路：回り道。
 883 梁肅：字は孟容、奉聖州(今の河北琢鹿)の人。天眷二年(一二三九)の進
 士、官は吏部尚書に至り、後に參知政事を拜命した。諡は正憲。
 884 舉子：科挙の受験生。
 885 諸生：知識字問ある人々、儒生たち。
 886 夏課：唐代では科挙の受験生は、落第後、都で夏を過ごし、文章を書く勉強を
 した。これを「夏課」という。
 887 膽勇：大胆さと勇氣。
 888 歴數：教え上げる。
 889 昏暮：夕方。
 890 陰晦：暗い。
 891 廊廡：表座敷前の廊屋。
 892 從曳：唆す。
 893 取信：信用する。
 894 周行：めぐる。
 895 廟門：宗廟、寺廟の門。
 896 徑：直ちに。
 897 摸索：手探りをする。
 898 世俗：当時の社会の風俗習慣。
 899 昏暮：酒に酔った後の意識不明。
 900 鬼物：幽霊、物の怪。
 901 環立：四周に立つ。
 902 環繞：取り巻く。
 903 自禁：自制する。
 904 大族：繁栄した一族。
 905 神識：意識。
 906 受室：妻を娶る。
 907 神物：神霊、物の怪。
 908 冥數：運命。
 909 通顯：官位高く、名声のあること。
 910 時人：当時の人、同時代の人。
 911 天賜：上天の与える。
 912

之に問詰せんと欲すれば、則ち氣息奄奄として、状は昏醉⁹¹³するが若し。
 諸生は真に鬼物⁹¹⁴なりと謂ひ、環立⁹¹⁵して之を守る。良や久しくして目を
 開き、人の環繞⁹¹⁶するを見、驚怖して自ら禁ぜず⁹¹⁷。此れ何れの地為るか
 を問ふ。諸生為に其の處、及び廟中に之を得たる者を言ひ、且つ其の人為る
 か、鬼為るか、何所(いずこ)従り來たるかを話(と)ふ。婦言ふ、「我れ
 揚州大族⁹¹⁸某氏の女にして、吉日を以て迎えられて婿の家に往く。輿中に
 在りて忽ち大風の飄(ふ)く所と為り、神識⁹¹⁹散亂し、何を以て此に至る
 かを知らず」と。諸生喜びて曰く、「梁生未だ受室⁹²⁰せず、神物⁹²¹乃ち揚州
 從(よ)り一妻を送り至れり、誠に冥數⁹²²の其の間に存する有り。因りて
 之を成す可し」と。梁公乃ち婦を攜へて歸る。尋いで擢第す。十數年なら
 ずして、身を通顯⁹²³に致す。婦は數子を擧ぐ。故に時人⁹²⁴に「天賜⁹²⁵夫人」

- 913 昏醉：感情の高ぶりを示す。
 914 鬼物：幽霊、物の怪。
 915 環立：四周に立つ。
 916 環繞：取り巻く。
 917 自禁：自制する。
 918 大族：繁栄した一族。
 919 神識：意識。
 920 受室：妻を娶る。
 921 神物：神霊、物の怪。
 922 冥數：運命。
 923 通顯：官位高く、名声のあること。
 924 時人：当時の人、同時代の人。
 925 天賜：上天の与える。

の目有りて、宮禁⁶¹³に傳達するに至る。梁公は大定二十年を以て、彰徳⁶¹⁴に節度⁶¹⁵たり、相下の耆舊⁶¹⁶、仍ほ之を見るに及ぶ者有り。兵亂の後、梁氏尚ほ多し、其の家世⁶¹⁷を問ふに、多く「天賜」諸孫⁶¹⁸の行⁶¹⁹と云ふ。

天賜夫人

廣寧の閻山公廟は、靈驗極めてあらたかであつたが、その神像が凶悪な相貌であり、また廟が樹木で覆われていることから、昼間であっても廟内に訪れるものは恐怖で総毛⁶²⁰だつた。近所では、「静かな夜には拷問の音が聞こえる」と言われていた。そのため、道ゆく人は迂回して、閻山公廟を避けた。参知政事の梁肅は、この地方の擗馬嶺に家があつた。科擧の受験生であつた時、受験生仲間と夏期の勉強会を開いたが、話のついでに鬼神の事が話題になり、同時代人で大胆で勇氣ある人物を数え上げたが、梁肅は全て認めなかつた。それで自ら「私は、夕暮れ時或いは真つ暗闇の時に、閻山廟に入つて、廊下をぐるると一周することができる」と言つた。仲間は彼をけしかけて「行くことができるというが、何を証拠とするのか」と言つた。梁肅は、「私は、見回つたところに必ず物で印をつけ、それを証拠とする」と言つた。翌日の晩に、皆で行くことを約束した。仲間は閻山廟の門外で待つていた。梁肅は気持ち奮い立たせて入つていった。印を付けつつ廟の東隅に到達し、手探りすると、壁に寄りかかつて立つ一人の人物がいることが分かつた。梁肅は、これは幽霊であると考え、背負つて閻山廟の外に出た。仲間は彼を迎えて何を見たかと質問した。梁肅は笑つて、「私は一匹の幽霊を背負つて出てきた。灯りで照らしてみよう」と言つた。灯りが来ると、それは美しい婦人であつた、衣装は世間一般のものと異なつていた。質問しようとしたが、息も絶え絶えで、酔つ払つて昏睡して

るようであつた。受験生仲間は本当に幽霊だと思ひ、周りを取り囲んで見守つた。しばらくして目を開き、人に取り囲まれているのを見て、恐怖を抑えられなかつた。ここはどこですかと聞いてきたので、仲間は彼女にこの場所と、閻山廟の中で彼女を見つけたことを話し、彼女が誰で、人なのか幽霊なのか、どこから来たのかを質問した。彼女は、「私は揚州の大族である某氏の娘で、吉日を選んで結婚相手の家に迎えられて行くことになつていたので、道中、輿の中にいる時に急に大風が吹き、意識が混乱して、どうしてここにやつてきたのかも知りません」と語つた。仲間は、「梁肅はまだ結婚していない。神霊が揚州から奥さんを送つてきたのだ。これには本当に定められた運命が存在するのだ。したがって結婚すべきだ」と喜んで言つた。梁肅は家に彼女を連れて帰つた。間もなく、梁肅は科擧に合格し、十数年も経たず、高位高官に至つた。夫人は子供を数人儲けた。こうして、当時の人は彼女を「天賜（上天の下賜された）夫人」とみなし、噂は宮中に達した。梁肅は大定二十年（一一八〇）に、彰徳の節度使となつた。彼が参知政事として副宰相の地位にあつた時代を知るお年寄りには、夫人にあつたことがある人がいる。モンゴル軍の来襲による金王朝の滅亡（一二三四）の後、梁氏一族は生き延びたものが多く、家の系譜を聞くと、多くは「天賜夫人」の孫の世代であるという。

2. 50 北面大王

613 宮禁：宮中。
614 彰徳：金の府、路の名、治所は今の河南安陽。
615 節度使：官名。節度使は一道或いは数州を管理し、軍、民、財政を統括した。
616 唐代に設置され、宋では名譽職となつたが、遼・金は踏襲し、元で廃された。

617 耆舊：年齢が高く人望のあるもの。
618 家世：家族の系譜。
619 諸孫：本家の孫の世代。
620 行：世代。

參政⁸²⁰の梁公肅⁸²¹は、擧子⁸²²の時、仙に祈りて前途を問ふ。仙批して云ふ、「六十にして入相する而已」と。後に彰德⁸²³に節度たり、年適たま六十なるも、入相を以て未だ應ぜず。會たま世宗⁸²⁴、宋人の驛中に就きて國書を取るに怒り、朝において、孰(たれ)か詳問使と為りて、君命⁸²⁵を辱しめざる可き者かを選ぶに、宰相公を以て詔に應ず。使して還り、旨に稱(かな)ひ、參政を拜す。入相の應乃ち此に在り。閻内翰⁸²⁶、子秀⁸²⁷、『筆錄』に、公臨終前二日に「上帝⁸²⁸、我を召し北面大王と為す」と言ひ、遂に卒するを記す。

北面大王

參知政事の梁肅(？ー一一八八)は、科擧受験生の時、仙人に祈つて自分の将来について質問した。仙人は回答して言った、「六十歳で宰相になる」と。後、彰德の節度使になったが、ちょうど六十歳であったのだが、「宰相になる」という予言は実現しなかった。たまたま世宗皇帝が、宋朝のものが、金朝の正旦使の宿舎から金朝の國書を持ち去ったことに怒り、朝廷で、宋朝への詳問使(事件の内容を問いたただす使者)を任命するのに、君命に

背かない人物を選ぶ時、宰相は梁肅をふさわしいものとして上奏した。梁肅は宋朝に使者として赴き帰還したが、皇帝の意図に叶う内容であったので、參知政事を拜命した。「宰相になる」という予言の実現はこのことにあるのである。応奉翰林文学の閻子秀の『筆錄』に、梁肅の臨終の二日前に「天帝が私をお召しになって北面大王に任ぜられた」と言つて遂に没したことを記している。

2. 51 劉政の純孝⁸²⁹

洛州⁸³⁰人劉政⁸³¹、初、幼くして至性⁸³²有り。母老いて失明す。政舌を以て之を舐むるに、旬を経て復見ゆ。病に及びて、晝夜醫藥を奉り、衣は帶を解かず⁸³³、股肉を刮⁸³⁴きて之に啖⁸³⁵はしむこと、再三に至る。母死し、土を負ひて墳を成し⁸³⁶、鄰之を助けんことを願ふも、受けず。禽鳥⁸³⁷哀鳴⁸³⁸して墓樹に集ふ。墓側に廬して⁸³⁹、喪を終ふ⁸⁴⁰。守臣⁸⁴¹以て聞し、世宗之を嘉し、

⁸²⁰ 參政：官名。參知政事の略称、副宰相。
⁸²¹ 梁肅：字は孟容、奉聖州(今の河北琢鹿)の人。天眷二年(一二三九)の進士、官は吏部尚書に至り、後に參知政事を拝した。諡は正憲。
⁸²² 擧子：科擧の受験生。
⁸²³ 彰德：金の府、路の名、治所は今の河南安陽。
⁸²⁴ 世宗：金の世宗完顔雍、一一六一―一八九年在位。評注は『金史』梁肅傳。「宋主屢請免立受國書之儀、世宗不從。及大興尹璋為十四年正旦使、宋主使人就館奪其書而重賂之。璋還、杖一百五十、除名。以肅為宋國詳問使……肅至、宋主一如約、立接國書。肅還、附書謝……世宗大喜、欲以肅為執政。……久之、為濟南尹……未幾致仕。起復彰德軍節度使、召拜參知政事。」を引用する。
⁸²⁵ 君命：使命に背く。
⁸²⁶ 閻内翰：唐宋では翰林を内翰と呼んだ。
⁸²⁷ 閻子秀：名は長言、濟南長清の人、好學で詞賦に優れ、科擧でトップ合格し、翰苑に十年勤めた。
⁸²⁸ 上帝：天帝。
⁸²⁹ 純孝：至孝。
⁸³⁰ 洛州：治所は今の河北永年。
⁸³¹ 劉政：『金史』孝友傳に伝記あり。列伝第六十五。
⁸³² 至性：天賦の卓越した品性。
⁸³³ 衣不解帶：服を脱いで安眠できない。病人を看護して苦勞することを形容する。
⁸³⁴ 刮：割く。
⁸³⁵ 啖：食へさせる。
⁸³⁶ 負土成墳：土を背負つてはこび墳墓を作る。一種の孝行の行為。
⁸³⁷ 禽鳥：鳥獸の通称。
⁸³⁸ 哀鳴：悲しげに鳴く。
⁸³⁹ 廬墓：父母あるいは先生の死後、服喪期間に、墓のそばに小屋を建てて住み、墳墓を守ること。
⁸⁴⁰ 終喪：父母の死後三年の喪を終えること。
⁸⁴¹ 守臣：地方長官。

太子掌飲丞³²を授く。事を以て史院³³の『本紀』³⁴に附す。

劉政の厚い親孝行

洛州の人劉政は、もともと、幼い頃から卓越した品性の持ち主であった。母親が歳をとって失明すると、劉政は舌で眼を舐めたところ、十日ほどしてまた見えるようになった。母親が病気になる、昼夜、医薬をもつて奉仕し、衣服を脱いで安眠することもなかった。自分の股の肉を切り取って母親に何度も食べさせることまでした。母親が死ぬと、自ら土を運んで墳墓を作り、近所の人が助力を申し出ても受けなかった。鳥が悲しげな泣き声を挙げて、墓の周りに植えた樹木に集まってきた。墓の側に小屋を建て、二十五ヶ月間喪に服した。地方官が朝廷に報告し、世宗はこれを賛美し、太子掌飲丞の官職を授けた。親孝行の実績を根拠として、金朝の国史院が編纂する『本紀』にその伝記を付載することになった。

『欽定重訂大金國志』卷三十四「太子掌飲令 太子掌飲丞 掌承奉湯茶酒果之事」。

史院・史館。歴史書を編集する役所。

『金史』卷七十三・列伝・孝友「劉政、洛州人。性篤孝、母老喪明、政每以舌

舐母目、逾旬母能視物。母疾、晝夜侍側、衣不解帶、剖股肉啖之者再三。母死、負土起墳、鄉隣欲佐其勞、政謝之。葬之日、飛鳥哀鳴、翔集丘木間。廬於墓側者二年。防禦使以聞、除太子掌飲丞。」